

金沢市近岡遺跡

1995

石川県立埋蔵文化財センター

例 言

- 1 本書は石川県金沢市近岡町に所在する近岡遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡の発掘調査は、金沢新港の造成工事に係る緊急発掘調査で、石川県教育委員会が調査主体となって実施した事業である。調査主任は石川考古学研究会の高塚勝喜氏で、発掘調査に当たっては同会の全面的な協力を受けた。
- 3 現場主任は石川県教育委員会事務局の四柳嘉章氏(現在 輪島高校教諭)で、現地作業は、1970(昭和45)年6月9日から13日まで行われた。
- 4 現地調査に当たっては、藤 則雄氏(金沢大学)の協力が得られ、遺跡の花粉分析が実施されていて、その概要は『考古学研究』第17巻第3号に報告されている。
- 5 整理作業は高塚勝喜氏が主としてあたり、石川考古学研究会の協力をを受けて実施している。実測作業に関わった人は、次の方々である。
浅野 豊子、川端 敦子、宮本 洋子(石川考古学研究会会員)
- 6 本書の執筆は、以下のように分担して行った。
第1章、第3章第1～3節 久田 正弘
第2章、あとがき 四柳 嘉章
第3章第4節、第4章第1節 大西 顕
第4章第2節 西野 秀和
- 7 本遺跡の出土遺物と諸記録は、石川県立埋蔵文化財センターが一括して保存管理に当たっている。
- 8 本書の遺物挿図の指示は次の通りであるが、適宜変更したものについては挿図に明示した。
 - (1) 挿図の縮尺 土器、石器一尺、石鏃・玉類一尺
 - (2) 写真図版中の遺物の縮尺は不統一である。
 - (3) 写真図版の遺物番号は、挿図内番号と同一である。

目 次

第1章 位置と環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第2章 調査に至る経緯と経過	6
第1節 調査に至る経緯と経過	6
第2節 層序と遺構	6
第3章 出土遺物	7
第1節 縄文土器	7
1. 第1群土器(その他の土器) 2. 第2群土器(中屋式) 3. 第3群土器(下野・長竹式)	
第2節 石 器	22
第3節 自然遺物	26
第4節 弥生時代以降の遺物	27
1. 弥生土器(後期後半)と土師器 2. その他の弥生土器 3. 奈良、平安時代の土器	
4. 中世の土器 5. 土鍾	
第4章 ま と め	39
第1節 弥生土器と土師器のまとめ	39
第2節 環状木柱列について	44
あとがき	45

挿 図 目 次

第1図 石川県全体図	1	第17図 石器実測図1(1/2)	22
第2図 周辺の遺跡(2万5千分の1)	2	第18図 石器実測図2(1/3)	23
第3図 近岡付近の発掘調査地点(1万分の1)	4	第19図 石器実測図3(1/3)	24
第4図 周辺の地形(5千分の1)	5	第20図 石器組成図	25
第5図 B-1-3区における土壌断面	6	第21図 弥生土器実測図1(1/3)	32
第6図 縄文土器実測図1(1/3)	8	第22図 弥生土器実測図2(1/3)	33
第7図 縄文土器実測図2(1/3)	9	第23図 弥生土器実測図3(1/3)	34
第8図 縄文土器実測図3(1/3)	10	第24図 弥生土器実測図4(1/3)	35
第9図 縄文土器実測図4(1/3)	11	第25図 弥生土器実測図5(1/3)	36
第10図 縄文土器実測図5(1/3)	13	第26図 弥生土器実測図6(1/3)	37
第11図 縄文土器実測図6(1/3)	15	第27図 古代以降の土器(1/3)	38
第12図 縄文土器実測図7(1/3)	16	第28図 変A・B分類個体数	40
第13図 縄文土器実測図8(1/3)	17	第29図 変A・B分類別頸部調整状況	40
第14図 縄文土器実測図9(1/3)	18	第30図 変A・B縁部指圧痕状況	40
第15図 縄文土器実測図10(1/3)	19	第31図 変A・B・C類口径分布図	41
第16図 縄文土器実測図11(1/3)	21		

表 目 次

第1表	種子計測表	26
第2表	土器器種構成比	27
第3表	土錘一覧表	31
第4表	変形土器構成比	42
第5表	変形土器分類別煤付着状況	42
第6表	各遺跡の環状木柱列一覧	44

本文写真目次

- 写真1 調査後撮影された石器
写真2 馬の歯

図 版 目 次

- 図版1 調査区遠景・近景
図版2 調査風景
図版3 層序、ピット検出・完掘、磨製石斧・井戸枠・土器・凹石・蛭出土状況
図版4 第1群土器、第2群土器
図版5 第2群土器(深鉢)
図版6 第2群土器(深鉢・蓋・壺)
図版7 第2群土器(注口・浅鉢)
図版8 第2群土器(浅鉢・粗製)
図版9 第2群土器(粗製)
図版10 第3群土器(深鉢)
図版11 第3群土器(深鉢・浅鉢・壺)
図版12 石 器
図版13 石器・自然遺物
図版14 弥生土器・土師器(甕)
図版15 弥生土器・土師器(甕・壺)
図版16 弥生土器・土師器(壺)
図版17 弥生土器・土師器(甕・壺・高杯)
図版18 弥生土器・土師器(高杯・器台・鉢)
図版19 弥生土器・土師器(鉢・蓋・小型)・須恵器
図版20 須恵器・珠洲焼・越前焼・土錘

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境

近岡遺跡は石川県金沢市近岡町地内に所在し、市内の北西部に位置する。現在の海岸線から内灘砂丘を挟んで約2km内陸側に位置する。内灘砂丘は2期の砂丘から成り、古期砂丘の上には縄文時代中期～弥生時代末の土器が出土している。当時は0.5～1km先に海岸線があったと想定され、新期砂丘は弥生時代末～古墳時代初めの短期間に形成されたようである(註1)。近岡遺跡は犀川・大野川などの河川で形成された扇状地の扇端部に位置し、現在は砂丘によって形成された後背湿地内の微高地に立地する。遺跡はかつては水田であり、北西方向に緩く傾斜している。標高は0.9m前後であり、縄文時代の包含層は標高0～21cmであった(註2)。戸水C遺跡とともに周辺遺跡の中でも最も標高が低い遺跡である。遺跡周辺を含め加賀地方の扇状地では現在低平な水田地帯が広がっている。これは大正～昭和初期にかけての耕地整理によって作り出された景観である。かつては起伏の富んだ地形であり、その微高地を選択して遺跡が立地していたと想像される。付近一帯はかつては過年自然湧水地帯であったが、現在は地下水の汲み上げなどにより、自然湧水は見られなくなった。

地名の近岡は南北朝期から見られる。明治期の近岡村は「加賀国石川郡村誌」によれば、地勢「大概平坦ニシテ盡く田圃トナル。北方沼田多ク地稍低シ。舟ニ乗シテ稲苗ヲスル。西北北洲ノ尾流ヲ帯ヒ。運輸便ナリ。人家中央に位ス。」、地味「土色赤黒。其質悪ク。北方沼田ノ所ハ稲ニ適ス。」とある。近岡遺跡(第2図1)は北方沼田にあたり、稲作には適した地点であったようだ。

第2節 歴史的環境

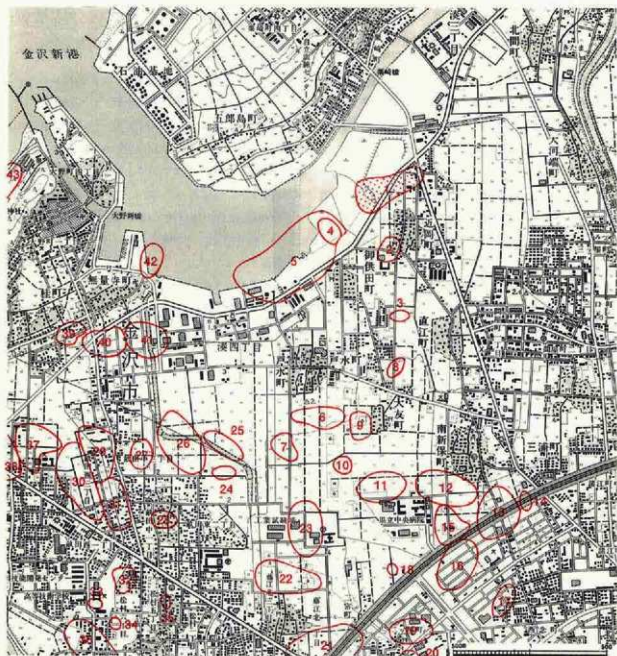
縄文時代 南西約6.5kmには中期中葉の標式遺跡である古府遺跡が存在する。新崎～占府式土器が出土した。南西約5kmには北加賀地方の中期後半の標式遺跡である北塚A遺跡が存在する。古府～称名寺式土器が出土しており、平成5年の調査では自然河道から木製容器の荒型が出土した。木製容器はケヤキ材であり、薄く調整する際に割れたために捨てられた可能性があるという(註3)。

周辺の縄文遺跡は畝田遺跡(第2図29)、松村A遺跡(36)、寺中B遺跡(37)、無量寺金沢港遺跡(42)などが存在するが、詳細は全て不明である。その理由は2千年間の土砂の堆積が大きく立ちはだかっているものと思われる。南西約3.5kmにある松村A遺跡では、地表下1m(標高1.5m前後)に晩期中葉の中層式土器が採集されており(註4)、2千年以上前の地形復元の難しさを一旦を表している。

近岡遺跡では過去4回の調査が実施された。第3図第1地点は本報告書の調査区であり、縄文の包含層の上に一部薄い間層を挟んで上に弥生の包含層が存在した(第2章参照)。縄文土器は八日市新保式～長竹式が出土した。中層式が主体であり、この包含層から稲の花粉が検出された。藤則雄氏は「稲作が始められた時期が(中略)縄文晩期までさかのぼれる」ことを提唱したが(註2)、数年前までは否定的意見が殆どであった。



第1図 石川県全体図



第2図 周辺の道跡(2万5千分の1)

- 1 近岡道跡—縄文—中世 2 近岡ナカシマ道跡—弥生・奈良—平安 3 近岡カンタン道跡—弥生—奈良 4 戸水C古墳群—古墳
 5 戸水C道跡—縄文—中世 6 戸水オモテ道跡—弥生—平安 7 戸水D道跡—奈良—平安 8 大友A道跡—奈良—平安 9 大友C道跡—不詳
 10 大友D道跡—奈良—平安 11 南新保E道跡—不詳 12 南新保C道跡—古墳 13 南新保D道跡—弥生—平安 14 南新保B道跡—弥生
 15 南新保三枚田道跡—弥生—古墳 16 西念・南新保道跡—弥生—平安 17 西念東道跡—弥生 18 二ツ屋町道跡—弥生・平安
 19 二口六丁B道跡—弥生—古墳 20 二口六丁A道跡—弥生—古墳 21 藤江B道跡—弥生—中世 22 藤江C道跡—弥生—中世
 23 戸水B道跡—弥生・平安 24 畷田ナベタ道跡—奈良—平安 25 畷田・無量寺道跡—弥生・奈良—平安 26 畷田C道跡—弥生—平安
 27 畷田B道跡—弥生—平安 28 畷田御台場跡—江戸 29 畷田道跡—縄文—平安 30 畷田・寺中道跡—古墳—中世 31 畷田大徳田道跡—奈良—平安
 32 松村西の風道跡—古墳・不詳 33 観音堂道跡—不詳 34 松村平田道跡—弥生 35 松村寺の前道跡—不詳 36 松村A道跡—縄文・古墳・中世
 37 寺中B道跡—縄文—平安 38 寺中道跡—弥生 39 柱道跡—弥生—古墳・中世 40 無量寺B道跡—古墳
 41 無量寺道跡—古墳・中世 42 無量寺金沢港道跡—縄文—古墳 43 金石北道跡—不詳

上層には月影式が多く出土した。第3図第3地点では現在の地表下60cmに月影式の包含層が確認された。月影式が主体で、中期の土器も出土したが、下層(縄文包含層)の状況は不明である(註5)。第4地点では縄文の包含層が2層確認され、晩期の土器が多く出土した(註6)。第2地点では耕地整理などで縄文時代の包含層が削られて殆ど残っていなかった。中層式が数点しか出土せず、大溝出土土器は月影式が主体であった(註7)。これらのことから縄文時代の遺跡は第3図第1・4地点を中心とする東側に主体的に分布し、第2地点にも存在したと想定される。

弥生時代 近岡遺跡では中期～後期前半の土器が少量出土した。月影式期には第3図第1・2地点を中心とする西側に主体的に分布すると想定され、第3図第3地点にも分布する。戸水C遺跡(5)では柴山出村式・遠賀川式・矢木ジワリ式土器が出土し、藤江C遺跡(22)では柴山出村式期の土坑10基が確認され、クルミを貯蔵した穴と思われる(註8)。南新保三枚田遺跡(15)、西念・南新保遺跡(16)、戸水B遺跡(23、註9)などで柴山出村式土器が出土した。寺中遺跡(38)では北陸第Ⅲ様式の土坑が溝状に連なる遺構が検出されており、土坑墓とされていた。現在では周溝を持つ建物であることが判明している(註10)。中期後半になると南新保三枚田遺跡、西念・南新保遺跡、戸水B遺跡、畝田遺跡、無量寺B遺跡、畝田・無量寺遺跡などで土器が多く確認される。戸水B遺跡(23)は北陸第Ⅳ様式の標式遺跡であり、周溝を持つ建物が検出された。

月影式期になると遺跡は多く確認されている。近岡遺跡、近岡ナカシマ遺跡(2)、近岡カンタンボ遺跡(3)、戸水C遺跡、戸水オモテ(ホコダ)遺跡(6)、南新保D遺跡(13)、南新保三枚田遺跡などがある。近岡遺跡では大溝から鉄の泥よけ2点、平鍬4点、藤柄鍬1点、エブリ3点、木庖丁5点、タモ1点、鉄斧柄1点などの多量の木製品が出土した。ほかにヒスイの石核や鉄器なども出土した。近岡ナカシマ遺跡(2、第3図5)では建物、方形周溝墓、溝、塚などが検出された。2号溝から藤柄鍬4点、木庖丁2点、タモ1点、糸巻き1点などの木製品が出土した(註11)。近岡カンタンボ遺跡(3、第3図6)では法仏～高島式期の溝が検出された(註12)。

古墳時代 月影式期の遺跡はほとんど古墳時代前期に継承されるようである。畝田・寺中遺跡、二口六丁遺跡などもある。畝田遺跡では月影～高島式の木製品が大量に出土した(註13)。特に注目するのは弧文板、玉杖形木製品、土骨などの特殊な遺物の存在である。古墳は戸水C古墳群(4)、藤江C遺跡などが確認されている。戸水C古墳群は現在までに15基の古墳、3基の前方後古墳が確認されている。藤江C遺跡では方墳1基と前方後方墳1基が確認されている。畝田・寺中遺跡では5基の方形周溝墓(古墳)が存在するという(註14)、周溝の形や廃棄土器の多さなどから、周溝を持つ建物の可能性が高いと思われる。

古代 遺跡周辺は越前国加賀郡大野郷に属していた。弘仁14(823)年最後の国、加賀国が立国された。遺跡周辺では「依」などの墨書土器が多く発見されている。近岡遺跡では「依」の墨書土器2点、木簡、人形などが出土した。木簡は「□解申田中殿□□」と読め、下の2字は日代の可能性があるという。近接する近岡ナカシマ遺跡では大型建物が検出された。戸水C遺跡では大型建物や律令的遺物から国家機構の関連施設が想定されていた。昭和56・57年の調査で漆紙文書2点が出土していた。平成6(1994)年の調査で大型建物の柱穴から「津」の墨書土器が出土したことから、国津の可能性が高くなった。藤江B遺跡(21)では「石田庄」の墨書土器が出土し、文献に無い莊園が存在した可能性がある。戸水B遺跡では漆紙が付着した須臾器杯が出土した。戸水D(オオニシ)遺跡では平成4・5年度の調査で掘立柱建物42棟、井戸8基などが検出され、人形・奇串などが出土した。戸水オオニシ遺跡の墨書土器には加賀国立国(823年)以前では「宿家」「依」、以後は「大市」「中」「大家」「中家」「西家」「西」などがある。木簡には「弘仁十三(822)年五月一日庚寅」の紀年木簡、「中庄十四条七廿四口」の条里木簡、「飛騨滿地万呂五斗」などの付札木簡がある。大友ホコダ遺跡(6の東側)では古代の小集落が存在するようである。

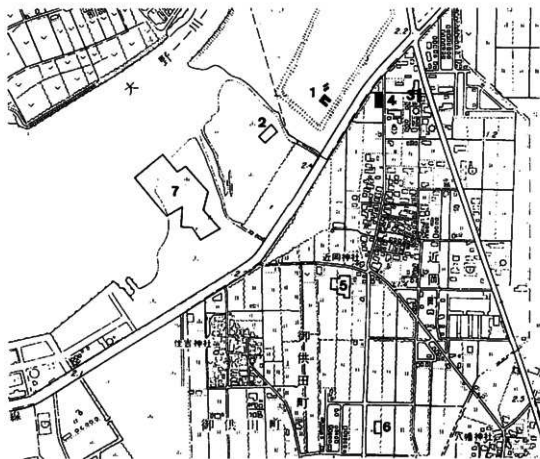
中世以降 近岡遺跡は南北朝期には加賀国石川郡倉月荘十六ヶ村(郷)の一部であった。第3図第1・2地点では中世の遺物も少量出土し、第3図第4地点では中世の集落が存在するようである。戸水C遺跡でも遺物が多く出土した。大友ホコダ遺跡では13世紀前後の溝に囲まれた建物が検出された。

近世には加賀藩領の石川郡近岡村となり、寛文10(1670)年村高942石、家石20軒、百姓数25人であった。明治5(1872)年石川県に所属し、明治9年(1876)年戸数63、人口320であった。明治22(1889)年鞍月村大字近岡となり、

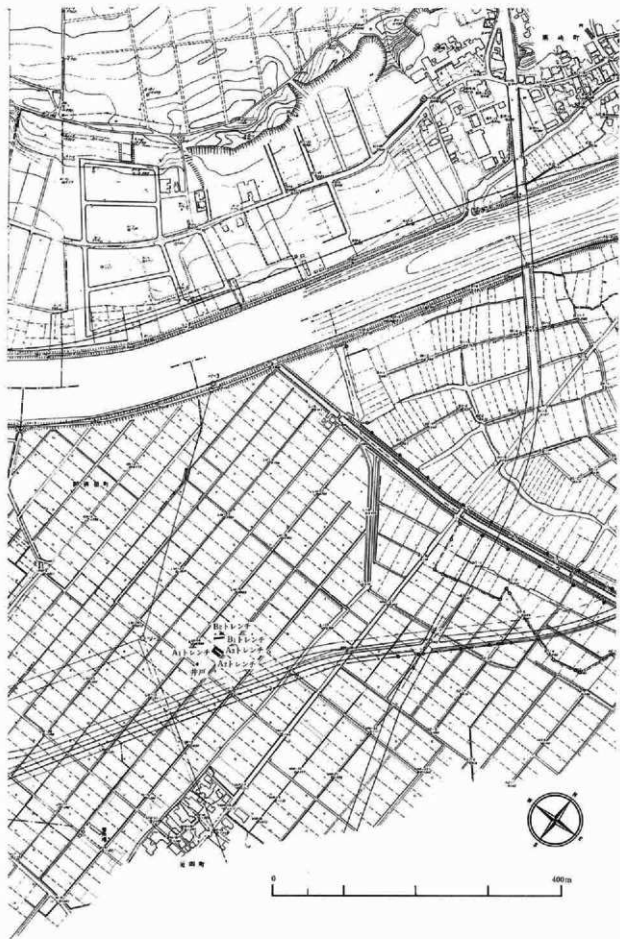
戸数63、人口390であり、昭和10(1935)年金沢市近岡町となる。昭和45年世帯数72、人口345であり、昭和46～49年に一部が分割されて溝1～3丁目になる。

註

- 1 藤 則雄 1975 「砂丘・埋没林」『金沢周辺の第4系と遺跡』北陸第四紀研究グループ
- 2 藤 則雄・四柳 嘉章 1970 「金沢の縄文晩期近岡遺跡からの桶の発見」『考古学研究』第17巻第3号
- 3 沢田まさ子 1994 「北塚遺跡出土の木製容器」『拓影』第43号
- 4 米沢 義直 1969 「金沢市松村晩期縄文遺跡概報」『石川考古学研究会々誌第12号』
- 5 宮本 智郎他 1984 「金沢市大友・近岡遺跡」金沢市教育委員会
- 6 金沢市教育委員会調査、楠 正勝氏教示。
- 7 橋本 英道他 1986 「近岡遺跡」石川県立埋蔵文化財センター
- 8 中屋 克彦 1990 「金沢市藤江C遺跡」『拓影』第33号
- 9 小嶋 芳孝氏教示
- 10 高橋 保 1979 「遺構の性格について」『下谷地遺跡』新潟県教育委員会
- 11 出越 茂和他 1986 「金沢市近岡ナカシマ遺跡」金沢市教育委員会
- 12 楠 正勝 1985 「金沢市新保本町東遺跡・西遺跡、金沢市近岡カンタンボ遺跡」金沢市教育委員会
- 13 伊藤 雅文他 1991 「畷田遺跡」石川県立埋蔵文化財センター
- 14 楠 正勝・南 久和 1984 「金沢市畷田・寺中遺跡」金沢市教育委員会



第3図 近岡付近の発掘調査地点(1万分の1)



第4図 周辺の地形(5千分の1)

第2章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯と経過

石川県は北陸の中心都市である金沢の中核的機能をより発展させることをねらいとして、金沢新港の造成工事を1964年から着手。70年度中の完成を目指していたが、同年春に工事区域内において縄文時代から中世にまたがる遺物が荒木繁行氏によって発見された。遺跡発見の連絡を受けた石川県教育委員会社会教育課では、低湿地での縄文遺跡発見を重要視し、北陸農政局・石川考古学研究会と数度の協議をもって、工事を一時中断して1970年6月9日から13日まで緊急発掘調査を行なうこととなった。

発掘調査主体は県教委であるが高畑勝吾氏を調査主任に委嘱し、石川考古学研究会の橋本澄夫・荒木繁行・福田弘光・高瀬 澄・安村伴義・米沢義直・直山邦雄氏、石川考古学研究会会員であり地質・古生物専攻の金沢大学藤則雄氏の協力をいただいて調査をおこなった。作業員では津幡町市谷から9名、吉野谷村中宮から6名、鳥越村河原山から3名、鶴米町中島から1名の計19名の方々の援助をいただいた。

調査区は南側のA地区に水田区画にそってコの字形に3本のトレンチを設定。A1トレンチは1×6m、A2トレンチは2×10m、A3トレンチは1×10mである。A地区から北15m付近のB地区に、東西に2本のトレンチを設定した。B1トレンチは2×11m、B2トレンチは2×5mとした(第4図)。水田面の標高は約0.9m前後であり、縄文晩期の包含層は標高0～21cmであった。発掘調査面積は68㎡である。

第2節 層序と遺構

遺構としてはA1トレンチで溝状遺構を検出したが、A2トレンチでも一端を確認できたので南側に伸びていたと考えられる。A2トレンチでは管玉が1点出土している。このA地区では主に弥生時代後半から古墳時代、中世の遺物がみられた。B地区では古墳時代遺物もみられるが、縄文時代遺物が主体的に検出された。遺構としてはB1トレンチ2区において配石と赤色顔料(ベンガラか)の広がり、中屋式土器・垂飾・凹石・磨石の分布が認められた。包含層が粘土質土壌であるため、すぐ移植ゴテに付着して使用できなくなり、しまいには素手で遺物を検出するという状態であった(図版2)。したがって遺構の性格などの検討は不可能であった。

層序はB地区の各トレンチにおいてプライマリーな状況を確認できた。すなわちB1トレンチ3区では、上から現在の耕土層・黄褐色土層(床土)・黒色粘質土(弥生後期～古墳前期包含層)・黒灰色粘質土層(縄文晩期包含層)・青緑灰色粘質土層の順に堆積(図版3)。弥生後期～古墳前期包含層と縄文晩期包含層の間には5～10cmの青～灰色の土壌薄層の夾在が認められた(第5図)。だが地区によってはこの薄層がなく、両時期の遺物が直接上下に重なり合うこともある。しかし、下層の縄文遺物内に弥生後期～古墳前期遺物が混入するということは認められなかった。藤則雄氏による花粉分析資料は、こうした包含層間の線引きが明確な部分より採集されたことを付記しておきたい。



第5図 B1-3区における土壌断面

第3章 出土遺物

第1節 縄文土器

縄文土器はパンケース5～6箱分が出土し、石川考古学研究会が10数年前に整理を実施した。今回追加資料を図化したために、図版の統一はとれていない。また図・器種の間違いなどが、原稿執筆中に判明したために図の番号などが飛んでいるなどの不備が多い。また実測図のみ存在する土器、数年前は存在したが現在は存在しない土器などがある点もご了承頂きたい。出土土器の大部分は中層式土器と下野・長竹式土器が9割を占める。以下群に分けて報告する。

1. 第1群土器

中層式、下野・長竹式以外の土器と時期が不明確な土器を一括した。1・2は八日市新保式と思われる。1は注口なし碗と思われる。2は波状口縁を持つ有段の浅鉢と思われるが、口縁部が短くて薄いことから、八日市新保式では無い可能性もある。

3～26は御経塚式であり、3～10は深鉢である。3は波頂部を内側に折り込んでいる。5は赤彩される。6・7は人組文とT字文を持つ。9は連結三叉文を持つ深鉢と思われる。10は縄文の部分が赤彩される。11・12は碗・浅鉢であり、赤彩される。13は外面が赤彩され、器壁の厚さを考えると深鉢の可能性もある。14～24・26は口唇部を厚く造る浅鉢類であり、1唇部には文様帯が数箇所存在する。文様帯には短い縦線や21のようなS字状などの貼付文と縄文が組み合わされる。文様帯は20のように連結三叉文で繋がるか、26のように無文の所もある。文様帯は赤彩されるのが普通であり、21～23は口縁部の縄文帯にも赤彩される。17は三叉文、15・16・19・20・22～24は連結三叉文を持つようである。辰口町岩内遺跡(註1)では16・18～24は中層式土器に伴って出土していることから、これらは第3群土器とすべきかもしれない。

25は口径16.2cm、底径3cm、器形5.3cmである。器壁が荒れているが、赤彩痕が認められる。短いT字文が逆に施文される。27・28は蓋であり、27は円とXを交互に配し、赤彩される。28は表面が荒れているが、連弧文を交互に配している。海綿骨針が胎土中に存在する。

時期が不明確な土器は29・30である。29は内傾する器形で口縁に沿って沈線が巡り、「フ」の字状の文様を持つ。304～306の口縁形態や調整が似ていることや文様がS字状文の一部とみれば、下野式期の突帯文壺とみられようか。30は最大径に突帯が巡り、赤彩痕が見られる。第2群土器(中層式)の注口土器であろうか。

2. 第2群土器

中層式土器と思われるものを一括した。大洞BC～C1式に併行する。中層式土器は一番多く出土しているので、無文の浅鉢・鉢などもこの中に含めたが、この群ではない土器もあるかもしれない。

深鉢1類(31～50・74・75・85)

入組三叉文を持つものを一括した。31の胴部には沈線を引いた後に列点文が施される。左側から右側に工具が入る。施文は右回りに行われている。底部一体部下半は縦方向、胴部は横方向のミガキがなされる。内面はミガキの痕が深く残る。32の列点文は左方向から入る。色調は乳白色である。33は入組三叉文の間に列点と縄文を配す。34は三叉文と横V字状文が交互に施される。34～38は胴部文様帯内に縄文を持つ。39は口縁部文様帯に入組三叉文を持ち、スガが付着している。口唇部は赤彩される。40・74は同一個体であり、入組三叉文の三叉を折り込んで区画沈線と連結させ(上側)、下側は折り込んで段を形成する。列点は右方向から入る。41は胴部の張る器形であり、口径11.4cm、頸部径10.2cm、胴部径16.2cmである。42の列点文は左方向から入れられ、右周りに施文される。43は頸部と胴部文様帯が連結している。列点は右方向から入る。45の列点文は右方向から入る。46の

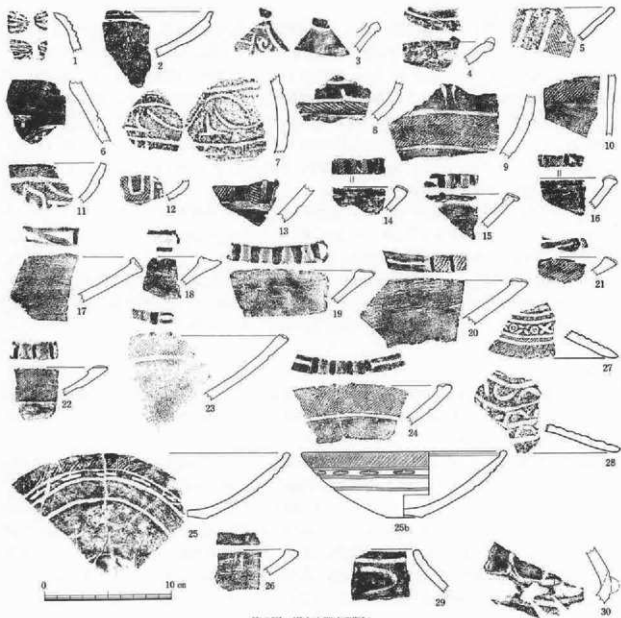
下の列点は左右から2回入れられる。48の色調は乳白色であり、胎土にはシャームットが入る。50には赤彩痕がある。85も入組三叉文を持つようである。

深鉢2類(51~62・201)

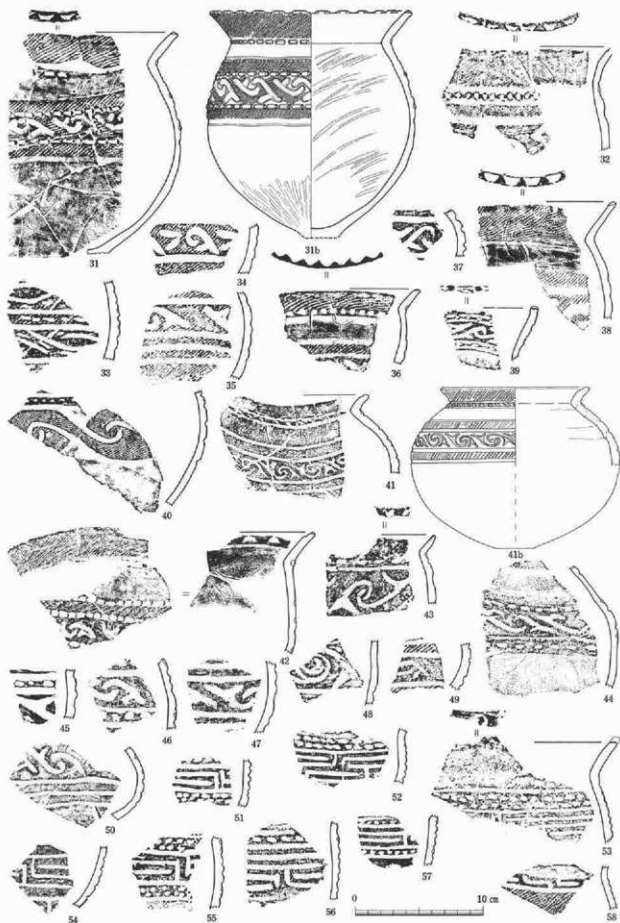
鍵手文を持つものを一括した。列点文は全て右方向から入る。51・52・57は列点文と沈線も左周りに施文されるようである。53の胴部上半の無文帯は狭い。58は頸部との境に段を設け、文様帯の上端に鍵手文と横L字状文が施文される。文様帯の上端に鍵手文が施文される例は殆んど無い。59~61・201はS字状の鍵手文を持つ。60は特に丁寧なミガキ調整である。61は口縁部文様帯と胴部文様帯が連結しており、御経塚式的である。口縁部には入組文ないし入組三叉文を持つ。201は文様施文後のナデにより文様がややつぶれている。

深鉢3類(63~73・78・82)

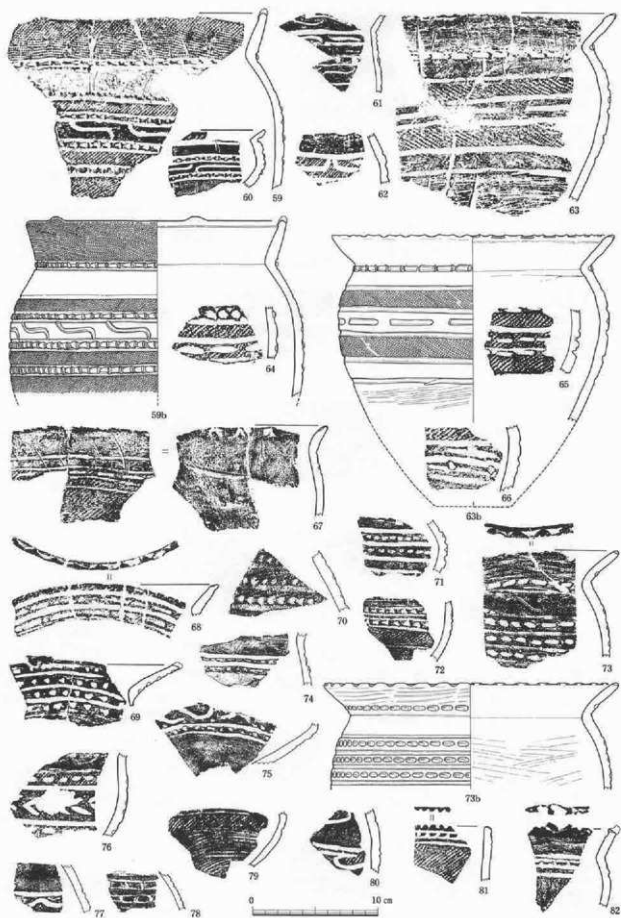
列点文を主文様とするものを一括した。63は胴部中央に長い列点文、頸部には区画用の列点文を持つ。両者とも左から右方向に引かれている。内外面共に波打つ接合痕を残す。体部の条痕は右から左方向に引かれる。65は下端にも沈線と列点文を持つ。中央の列点文以外は沈線間に列点文を入れる。66は沈線間の半降起帯に列点文を入れる。67は表面が荒れているために、模文か条痕が不明瞭である。68・69は口縁部文様帯に列点文を持つ類であり、



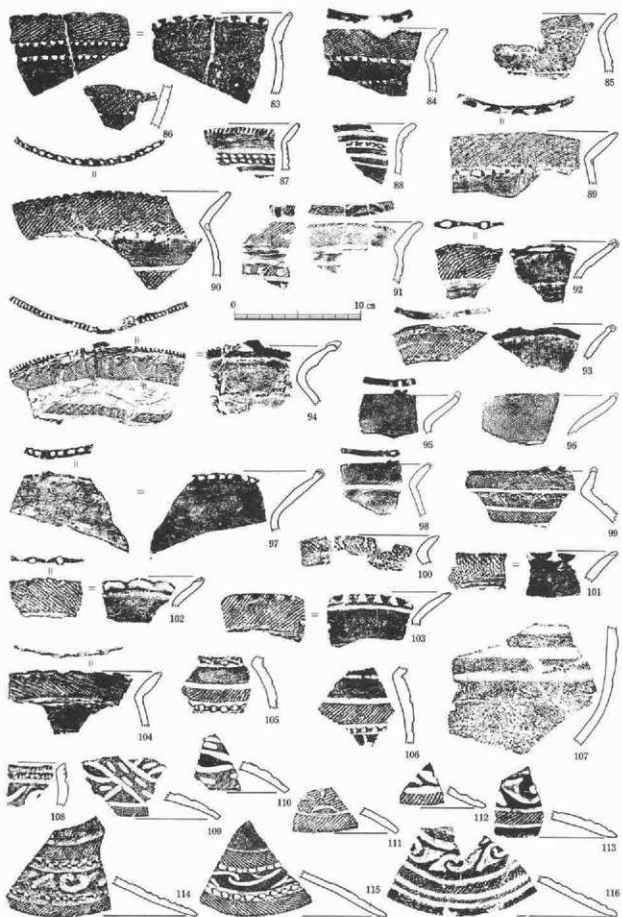
第6図 縄文土器実測図1



第7图 绳文土器实测图2



第8图 陶文土器実測图3



第9图 绳文土器実图4

68は縄文を地文に持つ。69は折った棒の先で刺突を行う。78は沈線間に縦の列点を入れるが後のミガキにより列点がやや崩れている。82は半隆起帯と中央の沈線に列点を持つ。

深鉢 4 類(80・81・194～198・202)

新潟・東北地方の影響を受けたものを一括したが、これらは胎土・色調などは地元の土器と同じである。81は大洞C1式系の深鉢であるが、80は入り組んだ沈線間に縄文を入れて、雲形文風にしたものであろうか。194は口縁部文様帯に、195～197は胴部に綾線文を持つ。198は網目状捺糸文であり、新潟地方では大洞C1式～鳥屋2式まで存在する(註2)。同一個体の破片が数個ある。

深鉢 5 類(76・83・84・86～107)

その他のものを一括した。76は横V字状の文様を持つ。83・84・86は列点を区画文様としている。83の列点は右方向から入り、赤彩される。89の列点は左から右方向に引かれる。91はミガキが非常に丁寧であり、色調は黒褐色で赤彩される。口唇部に粘土紐の貼付文と縄文を持つ。92・93は同一個体であり、口唇部に低い突起を付けて、刺突を加える。94は口縁部突起の内側付根を三角形に刻む。95～99には口縁部に突起がつく。96は赤彩される。97の刺突は棒を折ったものによる。99は赤彩痕がある。102は口縁部を小波状にして、その後刻みを入れる。口縁部内側の三角形刻みは深い。104の口縁部に捺糸を持つ。107は幅広い(凹線状の)沈線を持つ。

蓋 1 類(109～125)

入組三叉文をもつものを一括した。蓋は赤彩されるのが普通であるが、表面が荒れていて不明確な土器もある。109～111は入組三叉文の間に縄文を入れる。この土器は口唇部の形態を見ると浅鉢の可能性が高い。

蓋 2 類(137・138)

鍵手文を持つものを一括した。全て赤彩される。137は鍵手文と横L字状の文様を持つ。138はS字状に近い鍵手文を持つ。

蓋 3 類(128～135)

列点文を主文様にするものを一括した。134以外は赤彩される。129は紐掛け孔を持つ超小型の蓋である。130の幅みに入る列点は4個(単位)である。132は沈線の中に列点を入れる。135は入組三叉文の間に細長い楕円形の間に列点を入れたものであろうか。

蓋 4 類(126・127・136・139～146)

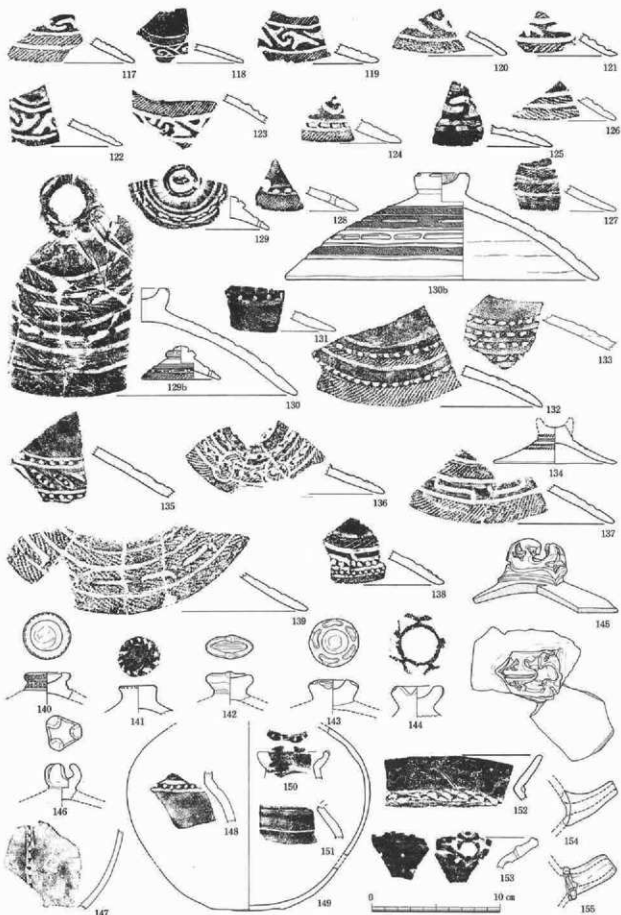
その他のもの、幅みを一括した。全て赤彩される。126・127は縄文の部分しか残っていないもの。136は沈線を入り組ませた中に縄文を入れる。139は横L字状の文様を持つ。140・141は列点文を持つ。142は2単位、145・146は3単位の突起を持ち、143・144は5単位の三叉文を持つ。145は3突起の部分と図左側の大突起の側面に十字状の刻みを持つ。

壺・注口(147～155・182・183・186)

147～149は表面が丁寧に磨かれており、壺と思われる。147は沈線間に押し引列点を入れ、赤彩痕がある。149は赤彩される。150は大洞系の小型壺ないし注口の口縁部であり、赤彩痕がある。182は雲形文を持つ大型の壺である。大洞C1式の雲形文であり、縄文帯を削出して表現している。表面は丁寧にミガキ調整、内面は条痕のちナデ調整である。色調は表面淡褐色色調、内面灰白色である。表面と内面の上端から2cm下まで赤彩される。183・186は半壺状文を持つと思われる、表面が丁寧にミガキ込まれているので、壺ないし注口と思われる。186は赤彩され、補修孔を持つ。152は深鉢の可能性もあるが、口縁部文様帯が無文であることや調整が丁寧にことから注口と判断した。赤彩痕がある。153は珊瑚状貼付文を持ち、赤彩痕がある。154・155は注口の口であり、154は付根側が横に広がる注口であり、御経塚式の可能性も否定できない。155は珊瑚状貼付文を持ち、寸胴の注口である。図化していないが珊瑚状貼付文を持つ口が1点ある(図版7)。

浅鉢 1 類(156～159)

入組三叉文を持つものを一括した。156は列点を区画文様としている。157は沈線の中に列点を繋げて文様になっている。158は大型の入組三叉文を持ち、入り組部分と三叉の先端を無文にする。赤彩される。159は入組文の間



第10回 縄文土器実測図5

に縄文を持つ。175は入組三叉文の間に列点文を入れる。赤彩される。176は入り組まない三叉文を持つ。109・110は縄文と列点が組み合わされる。

浅鉢 2 類(170～172)

鍔手文を持つものを一括した。170は口縁部文様帯と胴部文様帯を持つ。鍔手文の描き方は逆である。171は口縁部内面に段を持ち、外面は赤彩される。172は鍔手文ではなく、136のようになるのかもしれない。

浅鉢 3 類(173・174・179・180)

列点文を主文様とするものを一括した。173・180は沈線間の半隆起帯に列点を入れる。174は棒を折ったような工具で沈線と列点を引く。

浅鉢 4 類(184・185・199)

雲形文を持つものを一括した。全て赤彩される。184は雲形文を浮きだたせており、縄文を入れる。185は沈線で雲形文を描き、文様の内側を削り出している。199は沈線で雲形文を描くものであり、赤彩される。

浅鉢 5 類(161・162・165～168・177・199・200)

その他のものを一括した。161・162は珊瑚状貼付文を持ち、161は外面が赤彩される。164は口縁部内面まで縄文を施し、赤彩される。165は三角形の刻みの中が赤彩される。167・168は段を持つ浅鉢であり、赤彩される。177は懸糸状の縄文を持つ。200は赤彩される。

浅鉢 5 類(188～193)

無文のものを一括した。188は内面に段を持たない。189～191は内側に低い段を持つもの、192・193は高い段を持つものである。

粗製土器 1 類(212～241)

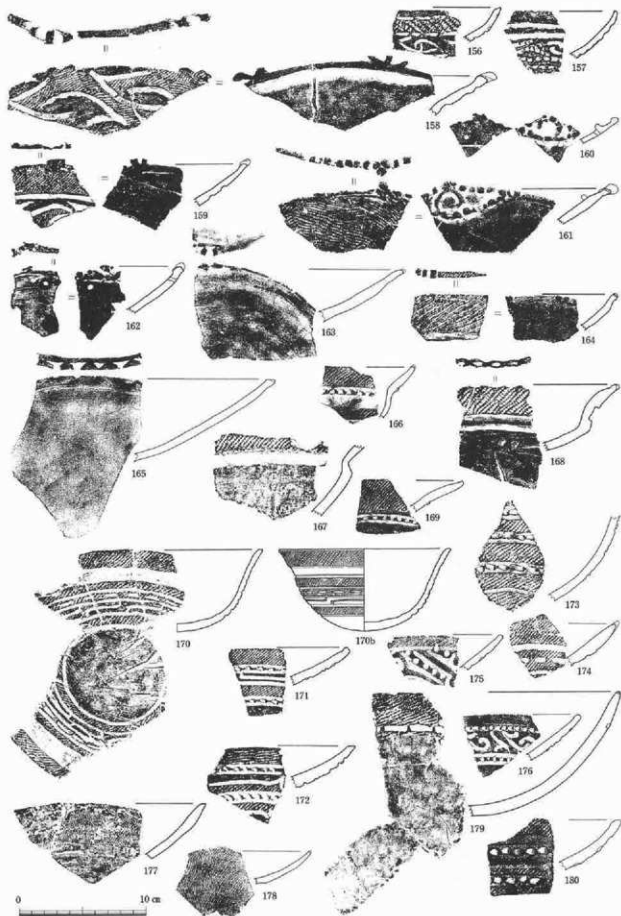
「く」の字状口縁を持つものを一括した。212～217は胴部が張るものであり、217以外は条痕調整である。218～227は胴部が張らないものである。219は幅広い沈線で文様を描き、口唇部には幅広い三角形の刻みを持つ。223・227の口唇部には小突起を持つ。224は外面に輪積痕を残す。228～230は口縁部外面に輪積痕を明瞭に残すものである。231～233は口唇部を面取るものである。238・239・241は口縁部内面に沈線が入る。241は口縁部内側に刻みが入り、縦の粘土紐が張り付けられる。

粗製土器 2 類(242～255)

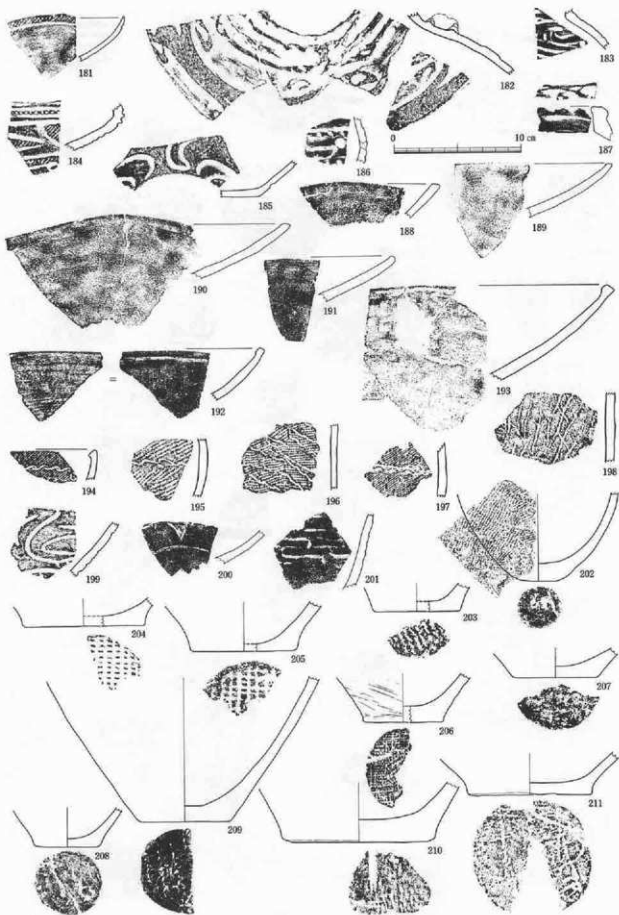
外傾する口縁をもつものを一括した。242・243は口唇部外面丸くするものである。248・250はミガキ調整である。253は外面に輪積痕を残し、内側は条痕調整である。254・255は同一個体であり、胴部は斜め方向、口縁部は横方向の条痕調整がなされる。

粗製土器 3 類(256～259)

無文のものを一括したが、第 2 群土器(中層式)であるかどうかは定かではない。



第11图 縄文土器実測図6



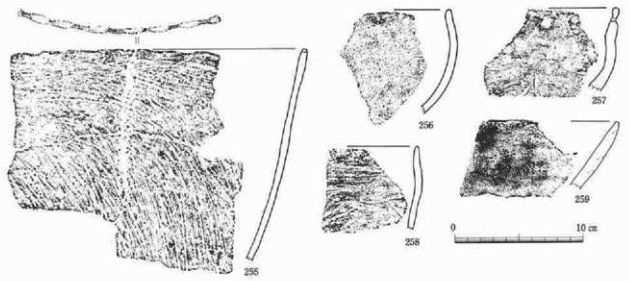
第12回 縄文土器実測47



第13图 绳文土器実測图8



第14回 縄文土器実測図9



第13图 绳文土器実測图10

3. 第3群土器

下野・長竹式土器を一括した。大洞C2～A式に併行する。

深鉢1類(260～262)

沈線文を持つものを一括した。260～262とも縦条痕である。260は幅広の沈線を緩くくびれた頸部に持つ。261は楕状具で胴部に沈線を引く。262は幅広の沈線を持つ。

深鉢2類(263～269)

列点文をもつものを一括した。263～265はく字状口縁の立ち上がりが弱いものである。263は260のように緩くくびれた頸部に列点を持つ。横方向の条痕調整、口唇部には指による押さえ(刻み)を持つ。264・265は斜条痕を持ち、264は口縁部に三角形の刻みを持つ。265は列点文の下に無文帯を持つ。266・267は無文と条痕調整の違いがあるが、口縁部に3列の列点文を持つ。268・269は沈線で囲まれた中に列点文を2段以上持つ。

深鉢3類(270～278)

2条沈線間に押引列点文を入れるものを一括した。270は口唇部に刻みを持ち、口縁部に小突起を持つ。横方向の条痕調整であり、沈線文が楕円工字文状に入る。271は口縁部から文縁内は条痕を磨り消している。口唇部には指による刻みを持つ。272～274は口縁部には沈線、胴部には2条沈線間列点文を配する。273は横方向の条痕を持つ。272・275～278は棒を折ったままの工具で施文する。272～274の口縁部文縁帯は沈線のみである。

深鉢4類(279～302)

条痕調整のものを一括した。279は少し「く」の字状にくびれる口縁を持ち、口唇部にはハの字状の刻みを持つ。280・281は縦条痕で、口唇部には大きな三角形の刻みを持つ。282～288は口縁部内側を細くする。291～300は口唇部をナデて面をとるものである。301・302は口縁部が内傾する深鉢である。

深鉢5類(303・307)

無文のものを一括した。303は内傾する口縁部を持つ。307は口縁部内外面に沈線を引くもので、突帯文系の深鉢であろう。

浅鉢1類(309～311)

沈線を持つものを一括した。全て口縁部に小突起を持つ。309は非常に丁寧にミガキ調整がなされ、口唇部に突起を持つ。310は突起の部分が欠けている。311は3本の幅広の沈線を持つ。

浅鉢2類(312・313)

楕円形工字文を持つと思われるものを一括した。312は縄文を持ち、薄く造られている。色調は灰白色である。313は燃糸(?)を持つようである。

浅鉢3類(314～320)

眼鏡状突帯を持つものを一括した。眼鏡状突帯は319以外は皆低く、しかも沈線と小突起で表現される。胴部文縁帯には縄文は施文されない。314は口縁部に2つの突起を持つ。316は口唇部を厚くしている。318は中央に沈線を入れる長方形帯の工字文を持ち、赤彩される。319は楕円形に近い工字文を持つ。320は口縁部である。

浅鉢4類(308・321～324)

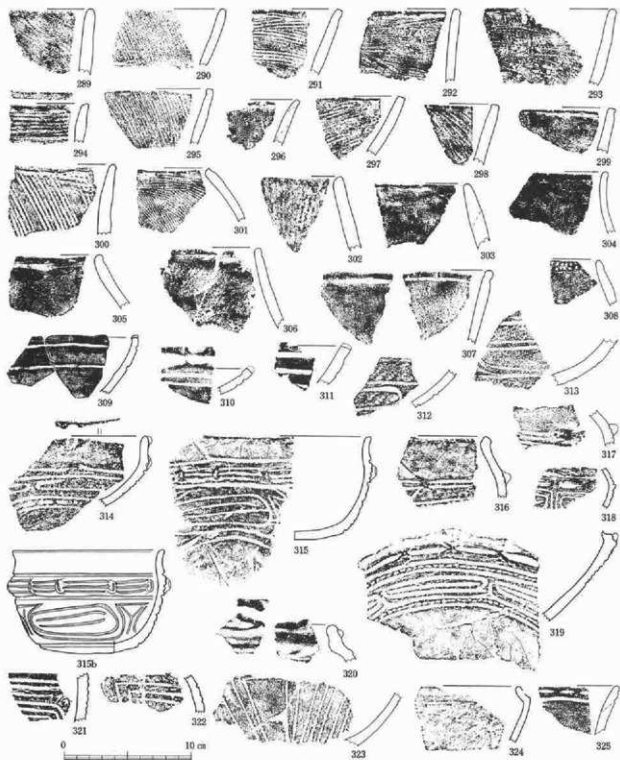
その他のものを一括した。321は工字文を持つものと思われる。322・323は同一個体であり、逆台形を重ねたような文様になるとおもわれる。324は突帯文系の浅鉢である。308は楕であろうか。

壺(304～306・325)

325は長竹式の壺と思われる。表面はミガキ調整である。304～306は横ミガキ調整の壺であり、口縁部が内傾し、口縁部に沈線ないし段を持つ。突帯文系の壺であり、第6図29も同類と思われる。

註

- 1 山本 直人 1986 『岩内遺跡発掘調査報告書』石川県立埋蔵文化財センター
- 2 石川日出志氏教示



第16图 绳文土器类陶器口

第2節 石 器

石器は2箱分が存在する。発掘調査時の写真に写っているが存在しない石器(写真1)、実測図があるが存在しない石器もある。後者については荒木繁行氏採集石器の可能性が考えられるが定かではない。以下存在しない石器もあるが、各石器器種毎に記述する。石質に関しては物石川界埋蔵文化財保存協会岡本繁一氏の教示を得た。

石鏃・石槍(1-9) 出土数は9点だが、3点が存在する。1-5は凹基式、6は平基式、7は有基式である。2は1.04g、6は1.29g、7は0.97gである。石質はフリントないしチャートである。

石匙(10) 1点出土した。鉄石英製であり、10gである。

玉類(11・12) 11は胴部が厚く、両端が薄い玉である。楕円形であるが、側面に3mm幅の面を持つ。蛇紋岩製であり、15gである。12は穴の内面が少し凹凸が見られることから、自然の穴と思われる。しかし玉として利用しているようである。蛇紋岩であり、3gである。

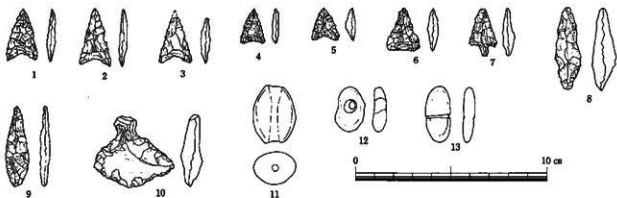
打製石斧(14・15) 出土数は3点だが、2点が存在する。14は短冊形、安山岩類、重量494gである。15は撚形、火山礫凝灰岩、530gである。

磨製石斧(16-24) 出土数は10点であり、5点が存在する。全て両刃磨製石斧である。16の先端には木の使用痕がある。16・19・23は蛇紋岩、20は安山岩質である。16は24g、19は49g、20は313g、23は290gである。

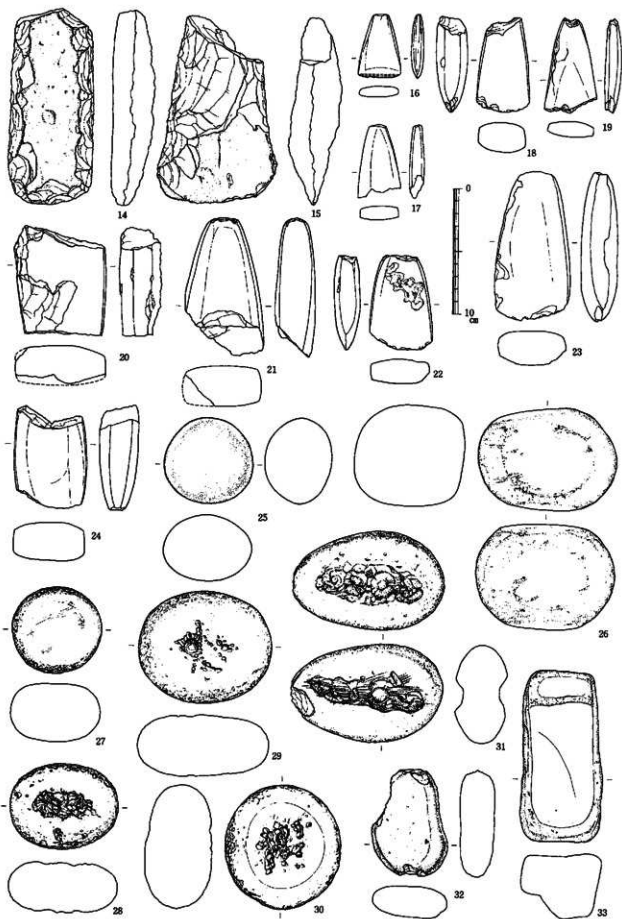
磨石・凹石・敲打石(25-30) 出土数は21点である。25-27は磨石であり、25は赤色顔料が半分以上に付着していることから、ベンガラを製作したものと思われる。石英質の石と思われ、314gである。26は4面を磨石として利用している。石質は安山岩、1057gである。27は側面を敲打石として使用する。石質は凝灰岩質安山岩、313gである。28-31は凹石である。28は側面を敲打石として使用する。石質は粗粒砂岩、330gである。29・30は磨石であるが、磨り面と側面を敲打石として使用する。29は安山岩、650gである。30は磨り面を持ち、側面を敲打石として使用する。石質は粗粒砂岩、685gである。31は凹石であり、表裏面とも4箇所の凹を持つ。安山岩質であり、487gである。

石錘(13・32) 出土数は3点であり、2点存在する。13は小型の有溝石錘である。32は打欠石錘であり、凝灰岩質安山岩、172gである。もう1点は不整形で大型品の打欠石錘(図版13)である。石質は粗粒砂岩、長さ10.5cm、幅10.7cm、厚さ2.7cm、重量437gである。

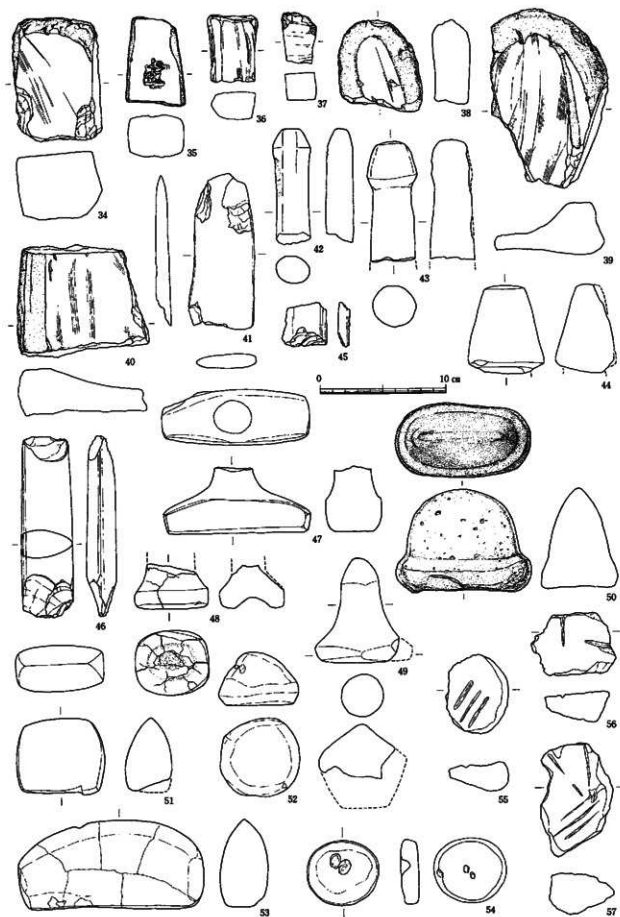
砥石(33-39) 出土数は7点であり、6点が存在する。磨製石斧・玉類用の砥石と想定される。37は弥生時代以降の鉄器用砥石であり、4面とも利用する。石質は流紋岩、39gである。33は凝灰岩質砂岩、909gである。35は粗粒砂岩の砥石であり、4面を利用する。重量は144gである。表裏面とも敲打痕が見られる。また、図上側の角を磨いて面を取り外している。36は3面を利用する。石質は流紋岩、73gである。38は砂岩質の石であり、187gである。中央部を砥石として使用したために凹んでいる。39は石皿を転用したものかもしれないが、右側面と裏面にも利用している。内面には3条の大きな凹を持つ。石質は輝石ないし角閃石安山岩で611gである。



第17図 石器実測図1(1/2)



第18图 石器夹图2 (1/3)



第1组 石器类图3 (1/3)

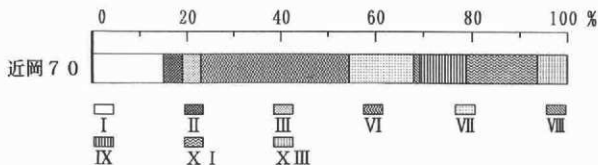
石皿(40) 出土数は2点である。46は砂岩の石皿であり、内面はきれいに磨られて凹んでいる。もう1点は平石の石皿で、両面が磨られている。

石棒・石剣(42~46) 出土数は4点だが、全て存在しない。45は石棒ないし石刀の破片であろう。

石冠(47~53) 出土数は7点であるが、1点が存在する。47は長方形の基部に石棒状の頭部がつくものと思われる。48・52は不整形の基部を持つ。49は五角形の基部を持つと思われる。50は楕円形の基部に船刃状の頭部を持つ。基部の裏はやや凹む。凝灰岩質安山岩であり、547gである。51・53は基部と頭部が融合した石冠であり、頭部の先端は船刃状になる。

剥片・石核類 メノウ1点、蛋白石3点、輝石安山岩6点、鉄石英3点、緑色凝灰岩2点、フリントないしチャート10数点存在する。

第20図は国立歴史民俗博物館の「農耕開始期における石器データーの収集」の分類基準による石器組成のグラフである。I狩猟具・武器-11点(15.1%)、II漁撈具-3点(4.1%)、III土掘具-3点(4.1%)、IV除草具-0点(0%)、V取糧具-0点(0%)、VI調理具-23点(31.5%)、VII伐採・加工具-10点(13.7%)、VIII加工具I(石錘・石匙など)-1点(1.4%)、IX加工具II(砥石・玉工具など)-7点(9.6%)、X紡績具-0点(%)、XI祭祀具-11点(15.1%)、XII用途不明(石製円盤など)-0点(%)、XIIIその他-4点(5.4%)



第20図 石器組成図

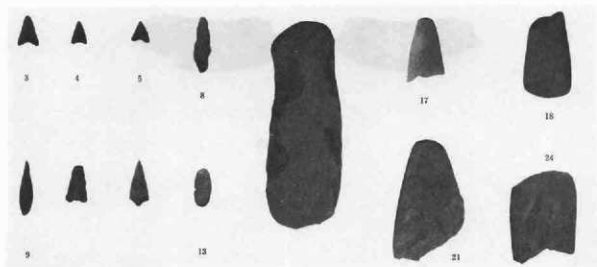


写真1 調査後撮影された石器

第3節 自然遺物

種子 ウメ1点、モモ4点、オニグルミ1点出土したが、全て出土地点、出土層位、時期も不明である。川端敦子氏によると図版13-2は藤江C遺跡川跡砂層(發生中前期葉以前)出土例例と酷似し、*P. davidiana*に近い古いタイプと思われる。4は炭化したためか、仁が残っている。

第1表 種子計測表(川端敦子氏計測、単位mm)

	長さ	幅	厚さ	形状	種類	備考
図版13-1	1.72	1.36	1.13	完形	ウメ	
図版13-2	1.76	1.57	1.22	完形	モモ(<i>P. davidiana</i> に近似)	炭化
図版13-3	2.06	1.75	1.38	完形	モモ	
図版13-4	2.54	(2.03)	1.50	ほぼ完形	モモ	
図版13-5	2.26	1.85	1.30	完形	モモ	炭化、仁は存在する。
図版13-6	3.35	2.74	(1.24)	半分	オミグルミ	

骨・その他 焼けた骨片3点が存在する(図版13)。表面がゴツゴツしており、鹿の角と思われる。馬の歯と思われるものがある(写真2、小嶋芳孝氏指示)が、焼けてはいない。鯉貝10点存在する。調査区の南側で井戸の曲物枠付近で多数の鯉貝が出土したようである(図版3)。

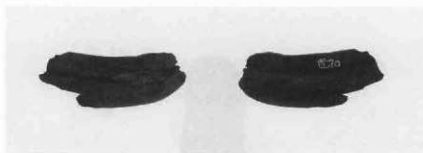


写真2 馬の歯

第4節 弥生時代以降の遺物

近岡遺跡よりは昭和45年の発掘調査によりパンケース13箱の弥生～古墳時代の土器と1箱の古代以降の土器を得ている。そのうち弥生後期後半～古墳前期のものについて主に形態差から、さらに調整差などにより分類を行い、弥生後期前半以前の土器と古代以降の土器は別個に扱った。また破片数の少なからグルーピングできないものについては形式分類よりはらずした。なお今回出土の土器は全て包含層一括資料であることを、あらかじめこたわっておきたい。

右の第1表は分類を行った弥生時代後期後半～古墳時代前期の土器の器種構成比である。計測方法は甕・壺・鉢・小型土器については口縁部片を数え、全周の1/36残っているものを0.02点、2/36残っているものを0.05点・・・と集計し、高杯・器台・結合器台は脚上位屈曲部を、蓋は鈕部片を含む破片をそれぞれ集計した。なお高杯、器台、結合器台については別に口縁部(結合器台は受部)について甕と同じように集計し個体数の欄にカッコ付きで載せた。鉢の個体数のカッコ内の数値は台付鉢の脚上位屈曲部のみを集計した結果である。

第2表 土器器種構成比

器種	構成比%	個体数
甕 A	20.9 (53.6)	14.1
B	11.3 (29.3)	7.7
C	3.8 (9.9)	2.6
D	0.9 (2.3)	0.6
E	1.5 (3.8)	1.0
F	0.3 (0.8)	0.2
甕 小計	38.8 (100.0)	26.3
壺 A	3.7 (32.5)	2.5
B	6.4 (55.8)	4.3
C	1.0 (9.1)	0.7
D	0.7 (6.5)	0.5
壺 小計	11.3 (100.0)	7.7
高杯	13.8	9.3(2.1)
器台	7.4	5.0(3.4)
結合器台(器台D)	5.5	3.7(2.5)
鉢	3.0	2.0(8.5)
蓋	14.8	10.0
小型土器	5.5	3.7
合計	100.0	67.6

1. 弥生土器(後期後半以降)と土師器

(1) 甕形土器

甕A類(第21図1～11) 有段口縁をもつ甕のうち口縁部の外面に擬凹線を施したもので5小形式に分類した。器面は頸部外面及び肩部上部をヨコナデ、胴部をハケ、内面は口縁部をヨコナデ、頸基部はくの字状を呈すものや、削り残しによる面(ナデ調整あるいはハケ状具痕が観察できる)をもつものがあり胴部はヘラ削りする。

A1類(第21図1・2) 口縁部が短くまた厚い。2は薄手でやや例外的である。口径平均16.6cm。

A2類(第21図3) 口縁部が長く、ほぼ直立するもの。3は口径37cmを測る大型品で口縁内面に指圧痕を密に残す。口径平均17.5cm。

A3類(第21図8) 口縁部が長く、その外傾、外反、端部先細りの程度が弱いもので、比較的厚い。またA4類に比べ口縁内面段部は比較的明瞭なものが多い。口径平均16.4cm。

A4類(第21図4～7・9～11) 口縁部が長く、その外傾、外反、端部先細りの程度が強いもので比較的薄い。そして概して口縁内面段部が弛緩化し不明瞭である。A類のなかで最も数の多いものである。4のようにA3類にやや近いものも含む。口径平均17.6cm。

A5類(第21図12) 小型の甕。口径平均14.2cm。

A類にはこのほかに口縁端部がわずかに外反する近岡ナカシマ遺跡甕A類(註1)に類似するものが0.4個体分、口縁部内面の段が不明瞭な同遺跡A類に類似するものが0.4個体分みられたが図示し得なかった。

甕B類 有段口縁で口縁部の内外面をヨコナデ調整するもの。4小形式に分類した。

B1類(第22図13) 短い口縁部がほぼ直立するもの。口径平均13.4cm。

B2類(第22図14・15) 長い口縁部がほぼ直立するもの。14は外面全体に煤が付着していることから甕として

使用されたと思われるが、胴部内面を厚さ2mm程度まで薄く削ったのち丁寧にミガキのような調整を行っており甕としては珍しいものである。口径平均16.6cm。

B3類(第22図16~18・20) 口縁部が外傾し先細りするものでB類のなかで最も数が多い。16は口縁帯外面に擬凹線を付けたのちナデ消しており、内面上方には指圧痕を残すものである。20は熱により口縁部が変形したもので内外面とも段が極めて弱いものとなっている。口径平均16.7cm。

B4類(第22図19) 口縁部内面の段が無い、あるいは弱いもの。口径16cm。

その他 第23図47は頸部に明瞭な稜をもち内面の段が弱いものである。

甕C類 「く」の字口縁をもつもの。5小形式に分類した。

C1類(第22図23) 鋭い頸部から口縁部が直線的に上方にのびるもの。口径14cm。

C2類(第22図24~28) 口縁部が短いもの。24は直線的にのびる口縁の端部が先細りの丸縁になっており、近岡遺跡CⅣ類(註2)に類似する。25、28は内外面にハケ調整が認められる。口径平均15.7cm。

C3類(第22図29~37) 胴部外面をタタキで仕上げたもの。小破片で全体がわからないが胴部内面上部はナデ、下部はハケ調整である。口径平均16cm。

C4類(第23図38・39) 口縁端部が小さく下方に肥厚するもので布留系の甕である。口径平均17.2cm。

C5類(第23図40) やや内湾しながら開く口縁部(内外面ヨコナデ調整)をもち底部が丸底のもの。40は胴部外面に微かなながらヨコハケ調整のあとがみられるほか胴部内面上部にはヘラ削り調整、下部に指頭圧痕がみられる。漆町遺跡Ⅰ類(註3)に類似する。

甕D類(第23図41) 口縁端部を面取りするもの。能登形甕といわれるものである。口径平均20.1cmと大きい。

甕E類(第23図42~45) 近江系と考えられるもの。42~44は受口状口縁をもつものである。42は口縁部に明確な段と口縁下部に櫛状具によると思われる刻み目をもつ。43、44は屈曲が弱い。45は口縁端部に巡る指頭圧痕状の刻みや口縁部内外面のハケ調整より「長浜甕」(註4)と考えられるものである。口径平均16.8cm。

甕F類(第23図46) 山陰系のもの。46は口縁上部のみが肥厚した口唇をもつことから山陰系有段口縁甕となると考えられる。内外面ともナデ調整である。口径25cm。

(2) 壺形土器

壺A類(第22図21・22、第3図48~50) 有段口縁をもつもの。

A1類(第23図48~50) 口縁部の内外面をヨコナデ調整するもの。49は大型の壺の口縁部。50は厚い口縁部をもち、内面頸部に口縁部接合の際ついたと思われる指頭圧痕を残す。また口縁部と肩部以下の外面に煤状の炭化物が付着するなど煮沸具としても使用されていた可能性が高い。口径平均16.7cm。

A2類(第22図21・22) 段が不明瞭なもの。21は径0.5~2mmの白色や灰白色の石粒をかなり多く含んだ胎土を使用した。口径平均14.8cm。

なお有段口縁をもつ壺のうち擬凹線を施すものが0.6個体のみみられたが図示し得なかった。

壺B類 口縁部に段をもたないもの。

B1類(第23図51~54) 頸部が直立、もしくはやや外反気味に立ち上がるもの。いずれもミガキ等の丁寧に調整を行っている。53は口縁内面に煤状の炭化物が付着しており興味深い。54の口縁内面の連続する刻み目状の筋は内面の1次調整(ハケ)のあとであろう。口径平均10.5cm。

B2類(第23図55、第24図56) B1類に類似するが口縁端部に面を取るもの。55は頸部内面に指頭圧痕が確認できる。56は近岡遺跡114が類例としてあげられる。

B3類(第24図57・58) 口縁部が狭い口頸部より斜め上方に立ち上がるもの。57は全体が橙色、ほぼ完成品の58は橙色から赤褐色に焼き上がっている。口径平均は10.7cm。

壺C類(第24図59) 大型有段口縁壺。口縁下部から肩部のみ残存している。59は頸部に装飾のもつ突帯をめぐらせている。

壺D類(第24図60) 無頸壺。口径5.5cmの小型品である。南新保D遺跡第103図12(註5)を類例としてあげるこ

とができる。小型(壺形)土器とすべきかもしれない。

その他 第24図61は壺の口縁部で外面にスタンプ文を施すものである。なお壺・壺のものと考えられる底部片のうち9点を実測している。第24図62・63は底径の大きなもので弥生中期の甕や壺の底部であろう。64は底径の大きさより法仏期の甕の底部と思われる。65~70は壺や甕の底部が考えられる。このうち66・70の胎土は石粒などの混入が非常に少ないものである。

(3) 高杯形土器

器面はヘラミガキやナデ等の調整で仕上げている。胎土は石粒の少ないものを使用しているものが多い。

高杯A類(第24図71) 口縁部が稜をもって体部から大きく外反するもの。71は口縁端部内面に弱い段を形成している。個体数としては非常に少ない。口径23.5cm。

高杯B類 内湾する杯体部と外反する口縁部をもつもの。

B1類(第24図72) 広い杯体部に短い口縁部のつくもの。72は杯体部内面のミガキ調整がやや雑な感を受ける。口径平均23.6cm。

B2類(第25図73・74) 口縁部が体部より長いもの。口縁部が肥厚するものが少ないなど若干の差はあるものの冬野遺跡群の「高座型式」(註6)の範疇に属するであろう。73は良品で丁寧なミガキ調整を加えており橙色の器面が光沢を放っている。口径平均23.2cm。

高杯C類 脚部をその形態より2小形式に分類した。

C1類(第24図77・76) 柱状部からゆるやかに開くもの。それぞれ4つの孔をもつ。

C2類(第24図75) やや膨らむ脚柱部が脚部で強く屈曲するもの。4つの孔をもつ。

その他 第25図78は小型高杯の口縁部であろうか。口径12.5cm。第25図79は脚部片で端部は大きく反転肥厚するほか径1.6cmの孔が確認できる。81は「八」の字状に広がるもので高杯なら上部に深身の杯部がつく冬野遺跡群の「御経塚ツカダ型式」になる可能性がある。脚部径11.5cmを測る。80は高杯の脚部であろうか。調整はミガキなど比較的丁寧なものである。

(4) 器台形土器

器面はヘラミガキやナデ等の調整で仕上げている。胎土は石粒の少ないものを使用しているものが多い。

器台A類 口縁部に幅広の面をもつもの。

A1類(第25図82・83) 受部が屈曲し、屈曲部外面で下稜をもつもの。受部径平均26.1cm。

A2類(第25図84・85) 受部は屈曲するが、屈曲部外面で下稜をもたないもの。ただし85は明瞭な稜をもっておりA1類に近いかもしれない。外面の一部と内面の口縁端部以下約1.5cmまでを赤彩している。受部径平均18.7cm。

器台B類(第25図86) 小型器台(脚部のみ)。3つの孔がはいる。

器台C類(第25図87・93・94) 結合器台。それぞれ涙滴形透孔と有段の脚部をもつと思われる。ほとんどの器面は橙色(93は浅黄褐色)であり、87は外面を赤彩している。94には涙滴形透かし孔を3組6箇確認できる。さらにもう1組分、異形の透かし孔が入っているが形状は不明である。受部径は16.5cm。

その他 器台の脚部と思われるものを5点実測している。第25図90は淡黄色で脚部径4.0cm、88・89と91・92は結合器台の脚部であろう。88は4つの孔をもち内外面とも赤彩している。89は平行線5本と刻み目で加飾している。器面は灰黄褐色である。91は平行線を施した段部(粘土を張り付けて形成)以下と内面を赤彩している。92は5つの孔をもつ。

(5) 鉢形土器

鉢A類(第26図95~97) 有段口縁で口縁帯内外面をヨコナデによって調整したものの。95は内面頸部以下をヘラ削りした後、指先で押さえている。96は外面ハケ、内面は口縁部ヨコナデ、頸部ハケ、胴部をヘラ削りにより仕上げている。口径平均14.7cm。

鉢B類(第26図98・99) 底部有孔鉢。98は逆円錐形を呈し口径11.2cmを測る。内外面ナデ調整で仕上げている。

99は内外面ハケ調整。

その他 第26図100は外面ハケ、内面ナデ調整で仕上げているが、体部に割れ口に孔のようなものが観察できることから蓋形土器の可能性もある。101は鉢あるいは壺の底部と思われ、外面はヘラミガキ、内面もミガキ調整で仕上げられており上部に1次調整(ハケ)の痕跡が残る。102～107は台付鉢の台部であろう。ナデを中心とした調整が行われている。108は柄状を呈すものである。

(6) 蓋形土器

蓋A類(第26図109～114) 頂部に明確な鈕をもち、鈕の中央が窪み左右に張り出すもの。遺存状況が悪く調整は不明だが内外面ともヘラミガキやナデ調整であろう。鈕部径平均3.2cm。113・114は鈕部が平坦に近い。

蓋B類(第26図115) 頂部に柱状の鈕をもち笠部は底部近くで屈曲している。通気あるいは紐を通すためと思われる孔をもち、鈕部径2.0cm。底径6.8cmの小型品である。

(7) 小型土器 小形のものを一括した。

小型A類(第26図116・117) 手づくね土器。器面はナデ調整。口径平均4.4cm、器高平均2.8cm。

小型B類(第26図118) 有段口縁をもつもの。118は口縁部内外面ナデ調整で赤彩を施している。小型の鉢形土器、あるいは小型裝飾壺になろう。口径平均11.3cm。

小型C類(第26図119) 「く」の字口縁をもつもの。119は内外面ナデ調整。口径平均11.3cm。

2. その他の弥生土器

第26図120～127はいずれも弥生中期の所産と考えられる土器である。120は口唇部にハケ状具による刻み目をもち頸部に蓋を載せるときに使う孔をもつ壺形土器あるいは壺形土器で中期でも古相を呈している。121は口唇部にハケ状具による刻み目、内面に斜行短線文をもつ壺形土器の口縁部である。122は壺形土器の口縁部で端部に面を取り、端部下半にハケ状具による刻み目と外面には横方向にハケ目をつけたあと右下がりのハケ目を施している。123・125は壺形土器の口縁部、124は内面に円形竹管文を施している。126・127は壺形土器の肩部と思われ外面に櫛歯の直線文、波状文を施している。

129は口縁端部を面取りし3条の縦凹線を施す壺形土器で弥生後期前半の所産であろう。

3. 奈良、平安時代の土器

第27図130～134、144・145は須恵器である。131は底部に明確なヘラ切り痕を残す。132・134は焼きがあまり灰白色である。133は底部内面に×字状のヘラ記号をもつ。杯の形状は8世紀～9世紀の所産であることを示している。144・145は壺あるいは壺の胴部で145は内面があて具により強く押しつけられて洗濯板状を呈す。第26図128は内外面にハケ調整を残す7～8世紀所産の埴であろう。

4. 中世の土器

第27図138～143は珠洲焼である。138は壺、140、142、143は壺あるいは壺の胴部で、139は底部である。141は片口鉢の口縁部である(拓本は外面のみ)。口縁部の形状から13世紀前半の所産と考えられるものである。137は越前焼の底部、135は非ロクロ成形の土師質皿で曾正寺遺跡の上層面出土第29図16(註7)に類似することから15世紀代の所産と考えられる。136は瀬戸・美濃のおろし皿である。

5. 土 鍾

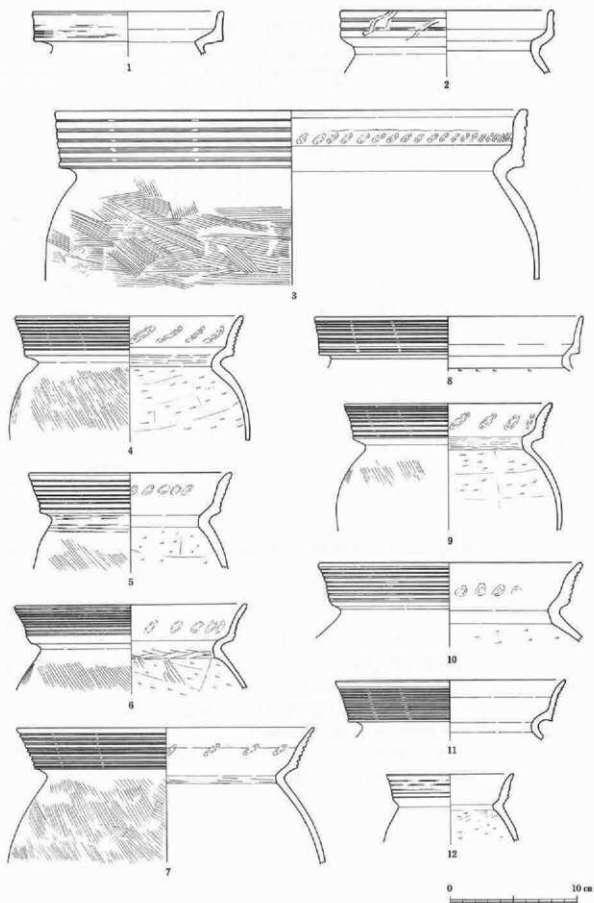
総数20点を実測している(第27図146~165)。第3表に一覧表を掲載する。

第3表 土鍾一覧表(完形以外の土鍾の重さ、長さ、幅は現存値を示す。)

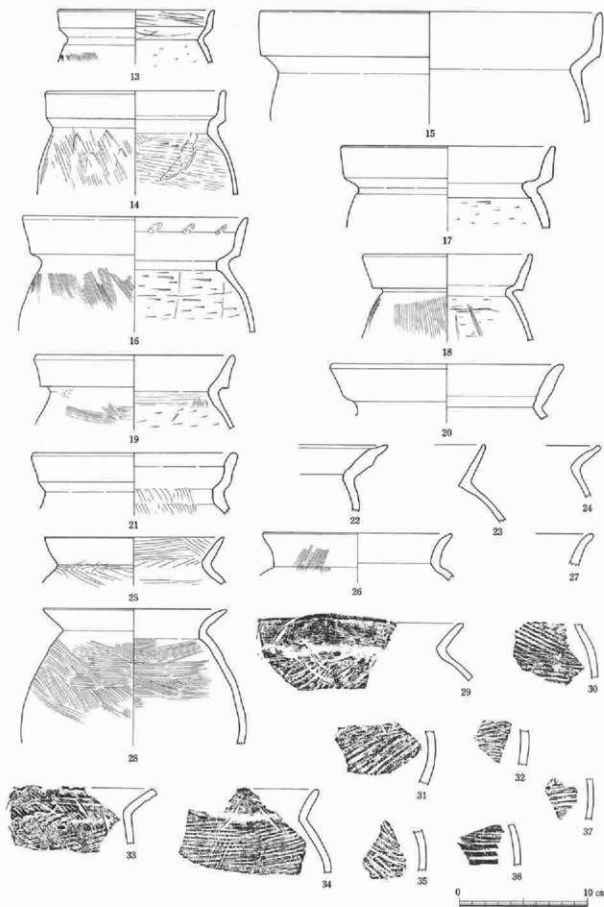
押図番号	遺存状況	重さ g	孔径 cm	長さ cm	幅 cm	色 調
146	完 形	46.3	1.2	4.9	3.5	灰白色 灰黄色
147	完 形	38.0	1.3	4.6	3.2	橙色
148	完 形	42.6	0.8	3.3	3.9	灰黄色
149	1/8欠	15.9	0.5	5.5	1.7	黄灰色
150	1/6欠	4.9	0.3	5.4	1.3	灰白色 橙色
151	1/9欠	6.3	0.4	4.8	1.3	にぶい黄橙色 黒色
152	1/9欠	5.2	0.4	4.3	1.2	黄灰色
153	1/10欠	2.5	0.3	4.7	0.9	灰赤色 橙色
154	1/8欠	2.8	0.3	3.2	1.1	にぶい赤橙色
155	1/10欠	3.9	0.3	3.4	1.2	にぶい橙色
156	1/3欠	28.6	1.3	3.3	3.3	浅黄橙色
157	1/2欠	22.0	1.1	6.2	3.3	橙色
158	完 形	14.1	1.1	3.7	2.3	浅黄橙色
159	完 形	9.3	0.4	2.8	2.0	灰色
160	1/5欠	1.6	0.3	3.7	0.8	橙色
161	1/9欠	1.8	0.3	3.1	0.9	橙色
162	1/6欠	1.3	0.2	3.1	0.9	灰赤色
163	1/10欠	1.4	0.2	3.2	0.8	橙色
164	1/10欠	1.6	0.4	2.7	0.8	にぶい赤褐色
165	口縁部欠	1.4	0.2	2.0	0.8	にぶい赤褐色

註

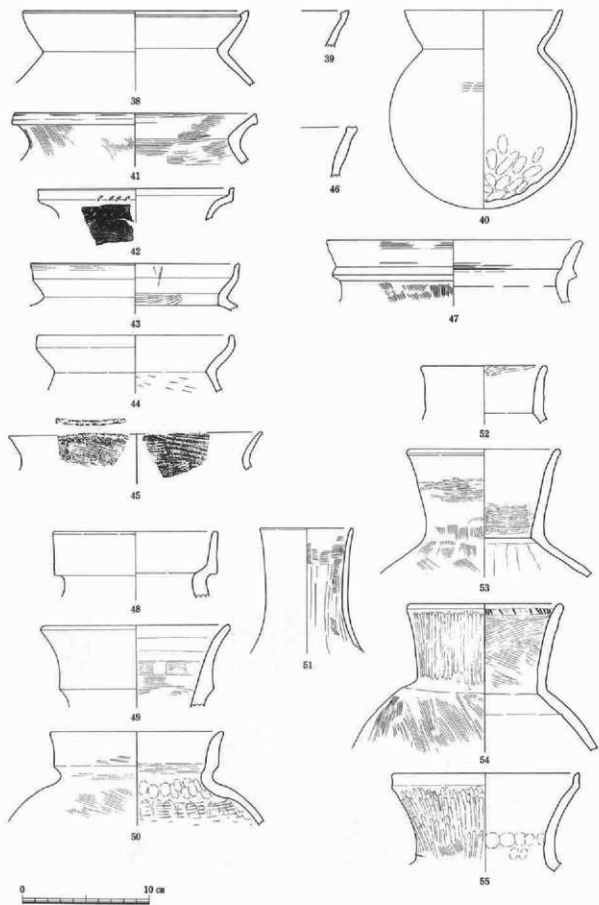
- 1 出越 茂和他 1986 『金沢市近岡ナカシマ遺跡』金沢市教育委員会
- 2 橋本 英道他 1986 『近岡遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 3 田嶋 明人他 1986 『諫町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター
- 4 「長浜渡」の内容に関しては『庄内式土器研究Ⅳ』(宮崎幹也他 1994 庄内式土器研究会)を参考にした。
- 5 宮本 哲郎他 1981 『金沢市南新保D遺跡』金沢市・金沢市教育委員会
- 6 北野 博司・松山 和彦他 1991 『押水町冬野遺跡群』石川県立埋蔵文化財センター
- 7 芝田 悟・垣内光次郎 1984 『首正寺遺跡』石川県立埋蔵文化財センター



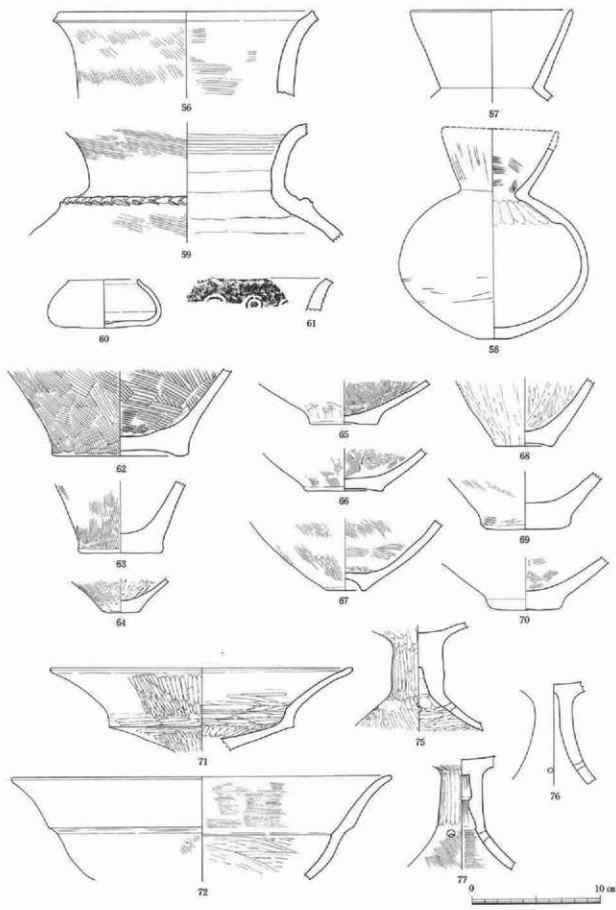
第21图 新石器时代陶器



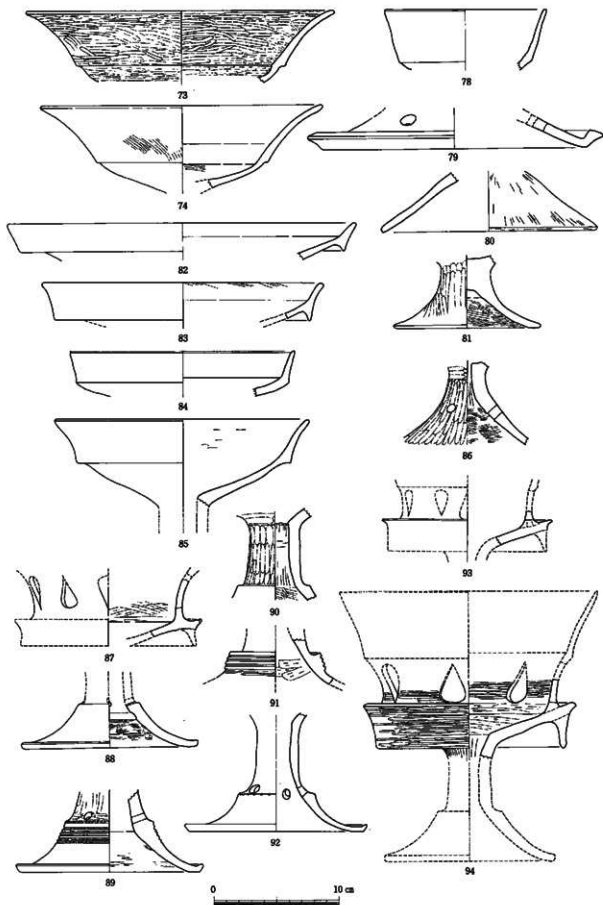
第22图 仰光土器实测图2



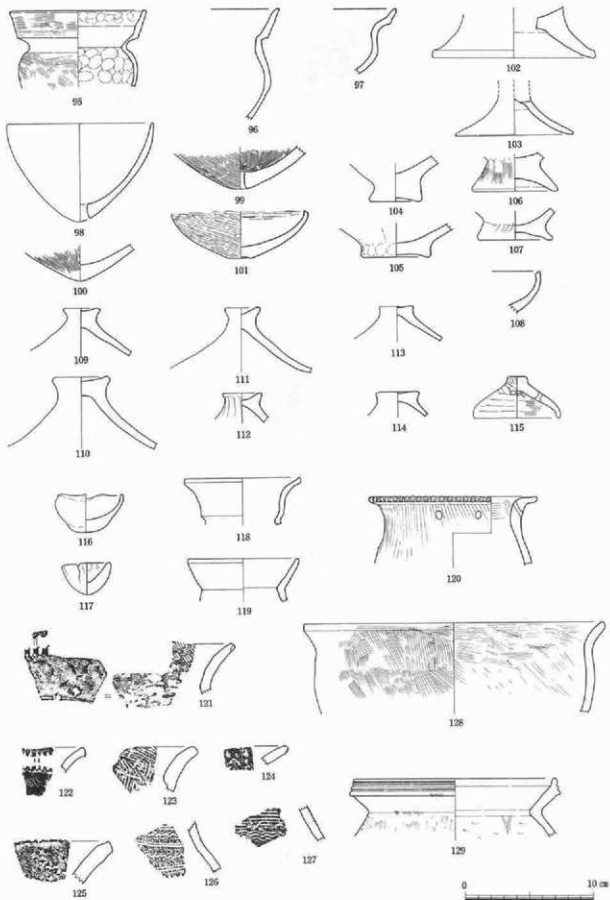
第23回 弥生土器実測図3



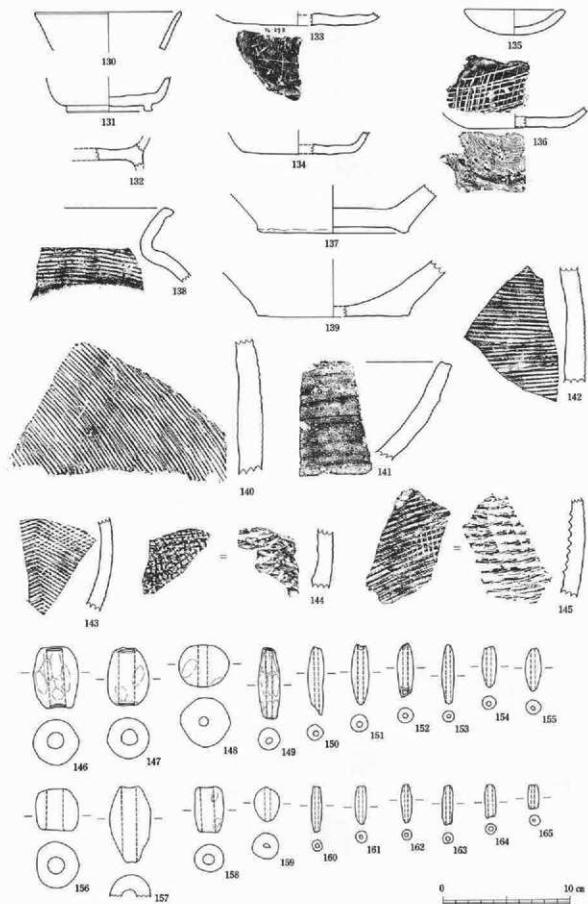
第24图 丹徒土器実測图4



第25图 陈牛土器类图5



第2组 弥生土器実測図6



第27図 古代以降の土器

第4章 まとめ

第1節 弥生土器と土師器のまとめ

1. 変形土器の頸部と指圧痕

今回出土した弥生土器のうち最も構成比率の高い変形土器(第28図は分類別個体数)について、頸部内面の調整、口縁部内面の指圧痕の状況に着目しそれぞれ分類してみた。近岡遺跡の報告(註1)にあるように有段で擬凹線を施す變の頸部内面にはハケ状具痕を残すものが相当数存在する。今回は擬凹線を施さない變Bも含めてその実態を求めて調査し、その結果を第29図にあらわした。Aタイプ(第21図3など)が頸基部までへう削りを行い、くの字状を呈するもの。Bタイプ(第21図8など)が頸基部を削り残すもの(削り残すことである程度の面が頸基部に形成される)、Cタイプ(第21図4など)は頸基部を削り残し、その削り残した部位にハケ状具痕をのこすものである。結果として次のような傾向が窺える。なお變A1～A4は単に口縁部の形態(外傾・外反の度合いを代表する)により分類したものでこのまま時期差を捉えているとは言い難いが、現在の月形式土器の編年感よりある程度の時間的方向性と並んでいると考えて論を進める。

變A類はA1類～A4類と外傾・外反がすすむに従いAタイプが減少する。それに対しB・CタイプはAタイプにおきかわるように増加する。ただし増加の程度はCタイプの方が大きい。すなわち頸基部を削り残しハケ調整するという技術的変化はその後も発展するが、そのハケ調整を省略するものも一定数存在している。A4類にわずかに残るAタイプの状況は遠町編年第6群變A1類の特徴を反映していると考えられる。

變B類は外傾・外反の方向と関係ないようであるが、Cタイプがみられないこと、Aタイプも少ないながら相当数存在するなど變Aとの明らかな相違点がみられる。

次に口縁内面の指圧痕の状況(第30図)だが、この指圧痕は月形式土器の變の1つの特徴として多く見られるものである。今回は指圧痕が見られないものをAタイプ、指圧痕の位置が比較的口縁部内面の下方にあるものを2つに分け指圧痕が密にみられるものをBタイプ(第21図3など)、間隔が開いたものをCタイプ(第21図6など)とし、さらに指圧痕が比較的上方にみられるものうち密にみられるものをDタイプ(第21図5など)、間隔の開いたものをEタイプとして調べてみた。その結果外傾・外反の度合いが強まるに従い指圧痕を残す變は多くなるが最後に再び減少する。指圧痕も密なものから間隔が開く方向に進む。上か下かは、初めは仰向きに上が主体、最後に下が主体となる。つまりA2變でなんらかの必要性があって始まる口縁部内面に指圧痕を残す技法だが、初めは丁寧なものが多かったが徐々に簡素になりついに指圧痕を残さない變が多くなる。

また變Bは指圧痕がみられるものもあるが、圧倒的少数であることがわかる。

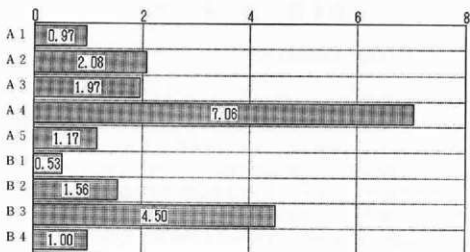
頸基部を削り残しハケ調整したり指圧痕を残したりと、ある何らかの必要上(例えば口縁部を接合するため、あるいは装飾的效果を高めるため)行われはじめたであろう調整技法だが、どうして時代を経るに従い形態化、または消滅するのであろうか。また變A類と變B類は同じ有段口縁をもつ變でありながら口縁部の調整にどうして大きな差異が生まれるのであろうか。これには變B類には体部の器壁が厚かったり煤が付着していないものが少数ながら散見できること、をも含めて今後、變B類の系譜や使用用途など変形土器のなかの變B類の位置付けについて考えていきたい。

2. 各器種の検討

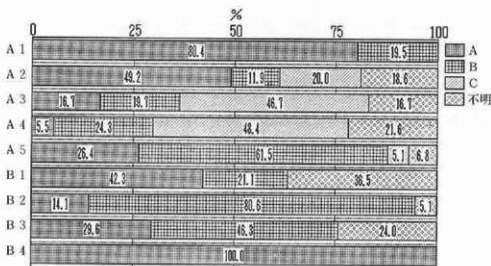
(1) 変形土器

変形土器は生座から廃棄までのサイクルが最も短い器種と考えられており(註2)、弥生時代後期後半の各遺跡をみても変形土器が最も多く出土する。今回報告分でも全体のなかの4割弱を占め最多である。

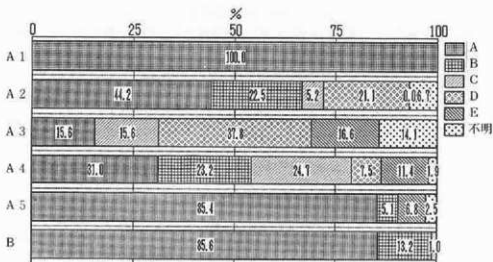
また第4表は近岡大溝、近岡ナカシマ2号溝そして今回報告分の変形土器の類構成比である。基本的にこれら



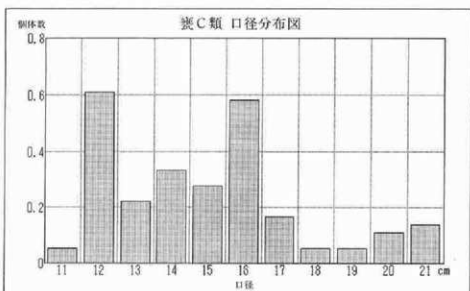
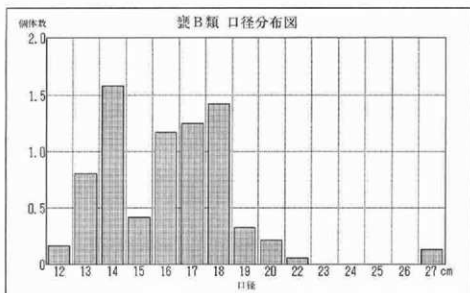
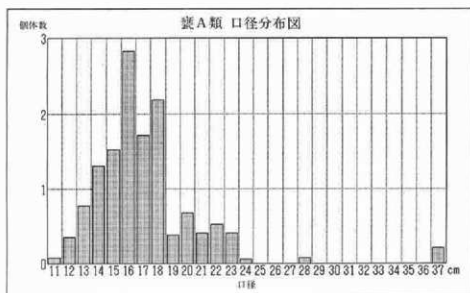
第28圖 表A・B分類別個体数



第29圖 表A・B分類別各部調査状況



第30圖 表A・B1部各部調査状況



第31図 表A・B・C類口径分布図

は同一集落で使用された土器と考えるとよいであろう。ただ土器が廃棄された時期がそれぞれ異なるため数値は様々である。さらに今回報告分は包含層資料であり時期的に一括性が乏しい。それでも変B類が北加賀の遺跡としてはすこぶる高い比率を示すこの遺跡の特徴をよく示している。これは河北海を通じての能登地方との交流が容易な地理的条件がはたしているのかもしれない。

なお、第31図は変A～C類の口径分布状況を示している。変A類が口径が16～18cm付近に集中するのに対して、変B類比較的、幅の広い口径の分布をとるものであること、などが読み取れる。

第4表 変形土器、類構成比(%)

	A類	B類	C類	D類
近岡大溝(1986)	62	25	4	4
近岡ナカシマ2号溝下層(1987)	56	39	4	1
近岡遺跡(1995)	54	29	10	2
近岡ナカシマ2号溝上層(1987)	45	34	18	1

*小敷点以下四捨五入した。

さて今回報告分の変形土器であるがA類では月影Ⅱ式期を中心に古くはA1類とした法仏期のもまでみられた。変B類も同様の時期のものであろうが前述のように口縁部の調整技法に関して筆者として少々関心のもてる結果を得ている。変C類は3類の庄内式変や4類の布留式変を得ているほか第23図40のように漆町編年第10群に比定できるものもあり、集落が古墳時代前期まで存続していることを示めている。また変D類とした能登形変や近江系の変も少ないながら少数存在する。しかし山陰系のものは3点しかなく北陸地方に少ないとされる「S」字状口縁をもつ変はついにみることはなかった。

(2) 壺形土器

A類とした在来の有段口縁壺のほかB類の短頸壺が主体で二重口縁壺や「く」の字口縁壺は確認できず外来系のもは第24図57、58などが見られる程度であった。また台付(装飾)壺と確認できるものもなかった。

ところで貯蔵用とされる壺形土器のなかにも実際は煮炊きに使用された例もあることは佐原の論文(註3)などにより指摘されている。そこで今回、壺の口縁部付近の煤の付着状況を調べ第4表に結果を示した。Aタイプは煤の付着がみられないもの、Bタイプが外面のみ付着しているもの、Cタイプは内面のみ付着しているもの、Dタイプは内外面に付着しているものである。その結果、付着率は約40%という数値を得た。分類別にみるとB類としたものの方が高く特に口唇部内面に顕著な煤の付着がみられる第3図53が興味深いところである。他の遺跡では弥生後期の分としては愛知県朝日遺跡(註4・5)が2%、大阪府池上遺跡(註4・6)が1.5%であり近岡遺跡の数値は、はなはだ高いものであると言える。ただし今回は口縁部のみの調査であるし、調査点数も非常に少ないものであるからひとまず論考はこれまでにして今後の調査事例を待つことにする。

第5表 壺形土器分類別煤付着状況(%)

	Aタイプ	Bタイプ	Cタイプ	Dタイプ
壺 A	64.8(1.6)	21.9(0.6)	9.8(0.2)	3.2(0.1)
壺 B	58.7(2.5)	18.0(0.8)	23.2(1.0)	0.0(0.0)
壺全体	60.3(4.1)	20.6(1.4)	17.6(1.2)	1.5(0.1)

*壺C、D類は除く。カッコ内の数値は個体数を示している。

(3) 高杯形土器

高杯形土器のしめる割合は14%であるがこれは口縁部計測法だと5%に満たない数値になるので途中で計測方法を変更した結果であり個体数を数えることの難しさを痛感した。さて今回報告分の高杯形土器であるが在来系

のA、B類が主体で外来系と確認できるものは非常に少なく、その可能性のある第25図78の小型高杯などがあるにすぎない。

(4) 器台形土器

高杯形土器同様在来系のもので占められ外来系と思われるのは第25図86など少数である。D類とした結合（裝飾）器台は比較的多く出土しており、第25図94のように透かし孔の数が少ないなど新相を呈するものが多い。

(5) その他の土器

鉢形土器の占める割合については口縁部計測法だと非常に少なくなり、器台形土器との関係よりいさかか不自然な結果である。ただし台付鉢の脚台部を数えると相当数にのぼる。また蓋形土器も鈕部を数えると変形土器に次ぐ高い割合を示すという結果であった。

鉢形土器・小型土器共に全形のわかる資料が無いため詳細は不明だが小型器台に付くような小型丸底壺等の土器はほとんど見られなかった。

おわりに

以上、近岡遺跡出土の弥生～古墳前期の土器について述べてきたが筆者の無知識により、報告に不備な点が数多くあることに深く反省するものである。ただ本文作成の際、センター職員のかたがたより多くの有益な御教授をいただいた。この場をかりて深く感謝の意を表したい。

近岡遺跡はこの遺跡の南西部に存在し古墳時代初期の墳墓群が相次いで発掘されている戸水C遺跡（*いづみ*C古墳群）と共に弥生～古墳時代の集落を考えるうえで非常に重要な遺跡である。周辺地域をふくめて今後の発掘成果に期待するものである。

註

- 1 梶木 英道他 1986 『近岡遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 2 安 英樹他 1991 『金沢市寺中B遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 3 佐原 真 1976 『弥生土器』平文堂
- 4 佐藤由紀男 1994 『煮炊きする壺』『考古学研究』第40巻第4号（通巻160号）考古学研究会
- 5 加藤 安信他 1982 『朝日遺跡I』愛知県教育委員会
- 6 井藤 暁子他 1979 『池上遺跡』土器編 財団法人大阪文化財センター

第2節 環状木柱列について

環状木柱列が縄文時代の遺構として明らかになったのは、昭和55年夏、金沢市新保本町チカモリ遺跡(旧 八日市新保遺跡)で金沢市教育委員会が実施した発掘調査による。膨大な数量に上る栗の木の半截柱群は、推定径1m近くにもなる材を使ったA環の環状木柱列跡と、それに複合する木柱列、隣接する丸柱跡に集約され、環状集落址の要所に立地するとの想定で、集落内での性格が論議されてきた。チカモリ遺跡の発見以後、真脇遺跡、米泉遺跡などで相次いで環状木柱列が確認され、豪雪地帯である北陸の地域性に絡んだ特殊遺構として閉塞的な性格付けに止まっているのが現在の研究情勢である。

筆者は金沢市米泉遺跡の環状木柱列跡の検討から、集落共同体の規範の中で配置されるのではなく、世帯共同体が所有する高床式倉庫建て上げに伴う祭祀の場と推定し、階層社会における富の再分配が、祭祀の中で意図されていると考えた。木柱は倉庫に使用する板材を得るために割り込まれたのであるが、柱の高さや環状木柱列が径1m近くにもなる材を使用しながら、その規模が巨大化しない理由については考えが至らなかった。

環状木柱列の規模が把握できるチカモリ、真脇、米泉遺跡での各遺構を比較すると、柱の推定径が約0.5mから1mまでの幅があるが、全体の径は5.5mから7.5mと柱材の幅に必ずしも比例しないのが、特色であると理解され、指摘もされている。巨木を柱としながら、建物全体の規模が遺例の住居と同程度の規模に止まるのは、通常の掘立柱建物とは異なる視点が必要である。掘立柱建物は、柱間の和で規模が、芯々間の距離の積で平面積が示されるが、円形をなす環状木柱列では、外に向いた柱の幅と柱間の距離に注目して考えたい。柱と柱の間の距離は各遺跡ごとに異なり、重複する環状木柱列でも揃えられる事はないが、各遺構で使われている柱の幅の倍数に近いことが読みとれる。丸材を割り込んで得られた板材を並び立てて、環状木柱列が構築されたと考えられ、板材を並び立てる環状木柱列の基本的構造に規制されて、柱材に巨木を使用しても全体的規模が拡大しないのである。板材で囲まれた空間での祭祀が終了した後は、割板は隣接する高床式倉庫で床・壁材として転用され、残された環状木柱列と共に、その大きさを誇示するのである。環状木柱列の地上高は、高床式倉庫に使われる割板の長さに合うものと考えられ、真脇の3.3m、米泉の3.5m、チカモリの4.1m→5.3mという値が得られるが、建築学的な検討が必要である。真脇、チカモリ遺跡では数例の礎板が確認されているが、全体に配されることがないのは重い柱材に対して不都合と思われる。一時的な祭祀の場とはいえ、木柱に礎板が配されるのは、他の柱群に対して高さの不足を補う為に置かれたのであろう。また、湾曲する門柱部が柱列に近接して置かれるのは、遺例の竪穴式住居とは異なる構造であることを示し、掘立柱建物も想定しにくいと考えている。

環状木柱列を巡る祭祀は、環状集落に規定される集落共同体の枠組みを変え、さらに、地域的な特殊遺構でもなく、後・晩期と時期的に限定されるものではないと考えられ、新たな視点での各地域、各時期、各遺構の見直しが必要と思われる。

第6表 各遺跡の環状木柱列一覧

遺跡名	規模cm	柱本数	柱幅cm	柱厚cm	芯々間cm	柱間cm	柱間数	原木数	推定板材数	高床式倉庫cm	柱径cm
真脇遺跡A環	750	10	85-99	22-37	216	122	9	5+	18	330×230	40
B環	620	10	49	16-22	180	130	9	5+	27		
米泉遺跡	550	8	48	14	250	200	7	4+	28	350-250	20
チカモリA環	640	(10)	71-89	12-34	180-230	90-170	9	5+	18	530-420	50

参考文献

- 南 久和 1983『金沢市新保本町チカモリ遺跡 遺構編一』金沢市教育委員会
 山田 芳和 1986『真脇遺跡』能登町教育委員会
 西野 秀和 1989『金沢市米泉遺跡:石川県立埋蔵文化財センター
 ニュー・サイエンス社 1994『月刊 考古学ジャーナル』7 No.377

あとがき

近岡遺跡の調査は1970(昭和45)年で、今を去る25年前。北陸自動車道建設が目前にせまり、県教委に初めて埋蔵文化財の専任職員を配置するからと、県郷土資料館から異動して2年目のことである。当時、県庁開発部局は埋蔵文化財への理解はほとんど無いに等しい状態で、埋文に関する法規集を作成して関係部局との説明会を開催し、事前協議や分布調査の必要性を説いて回った時代である。あまりにも開発優先の行政の態度に、大学でたての若僧は2度ばかり辞職願いを出したこともあった。そんなとき常に論じ指導していただいたのは、今はなき高塚勝喜先生である。たった5日ばかりの近岡遺跡の調査を行うにも、開発部局との激しい応酬があり、高塚先生は今からケンカをするから見ておきなさいと、咳呵をきられたものであった。若い人たちには考えられないことだが、文化室ができるまではこのようなことは日常茶飯事であった。

近岡遺跡の調査は、わずかの調査期間と狭い面積ではあったが、当時の緊急調査としてはこれが限度であった。しかしながら、現県立埋蔵文化センターの橋本澄夫所長はじめ石川考古学研究会会員の献身的な協力をえて、きわめて困難な調査ではあったが縄文晩期の低湿地遺跡の実態を確認することができた。その最大の成果は藤則隆先生による晩期包含層からの稲花粉の検出である。この重大性に鑑み、さっそく1970年12月刊行の『考古学研究』第17巻第3号に「金沢の縄文晩期近岡遺跡からの稲の発見」と題して、匿名で概要発表を行った。

当然ながらこの発表に対して、縄文時代に稲作が行われたなんて正気の沙汰ではない、という批判が県内外から聞かれた。もちろん藤先生はさまざまな著書・論考において、仮説検証的なデータに誤りのないことを論証されているし、考古学的な検討としては、1973(昭和48)年の日本考古学協会大会で「晩期遺跡の立地と石器」、1975(昭和50)年の「縄文時代晩期農耕論によせて一石川県における縄文晩期遺跡の動向」(『石川県高校社会科教育研究会紀要』8号)に、遺跡の垂直的下降移動現象とくに低地型立地遺跡における打製石斧減少傾向の問題についてふれた。最近、細川喜則考古学論集『北陸における縄文時代文化の研究—能登半島周辺の古環境と生産活動』(中島町教育委員会、1993)に、このあたりの評価について冷静にとりあげているので、参照いただければと思う。

今日では縄文時代の稲作について疑義を差し込む余地はなくなったが、その契機となった近岡遺跡の正式報告書が未完であるというのは心残りの1つであった。当時、縄文農耕という重大な意義を有するが故に、早急に報告書を出してほしいと藤先生から申し出があったので、さっそく高塚先生と相談の結果、原稿は高塚、実淵・トレス・榎岡作成は四柳ということになり、調査翌年にはこれを提出した。その後筆者は学校に転出し、諸般の事情でそのままになっていたが、十数年前に石川考古学研究会で弥生・古墳時代遺物を整理することになり、縄文遺物も再度検討を加える機会もたれた。しかし、これもそのまま歳月が流れ、ついには高塚先生も不慮の人となられたのである。この間の事情を知る関係者も筆者だけになってしまったのであるが、県立埋蔵文化財センターの西野秀和氏からなんとか公刊したいとお話があり、同センターの久田正弘氏を中心に整理を進めていただくことになった。久田氏は高校時代から考古学に興味をもち、筆者の発掘現場にも親しく顔をだした同柄である。研究領域からいっても題材を得たというべきであろう。また執筆分担された気鋭の大西 颯氏にもお礼申し上げます。近岡遺跡は縄文古環境研究の先駆をなすものであるが、弥生～古墳前期の集落研究においても、重要な遺跡であることは本書で明らかにされた通りである。本書刊行にかかわった関係各位に深く感謝申し上げるとともに、大方のご叱正をお願いする次第である。

四柳 嘉章

報告書抄録

ふりがな	かなどわしちかおかいせき							
書名	金沢市近岡遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編集者名	四柳 嘉章、久田 正弘、大西 顕、西野 秀和							
編集機関	石川県立埋蔵文化財センター							
所在地	石川県金沢市米泉4丁目133番地							
発行年月日	1995年3月30日(平成7年)							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'"	東経 °'"	調査期間	調査 面積m'	調査原因
		市町村	遺跡番号					
近岡	石川県金沢市 近岡町	17201	01298	36° 36' 40"	136° 38' 10"	1970年6 月9日か ら13日	68m'	区画整理
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
近岡	集落跡	縄文時代 弥生時代		土器、石器				



調查区 遠景



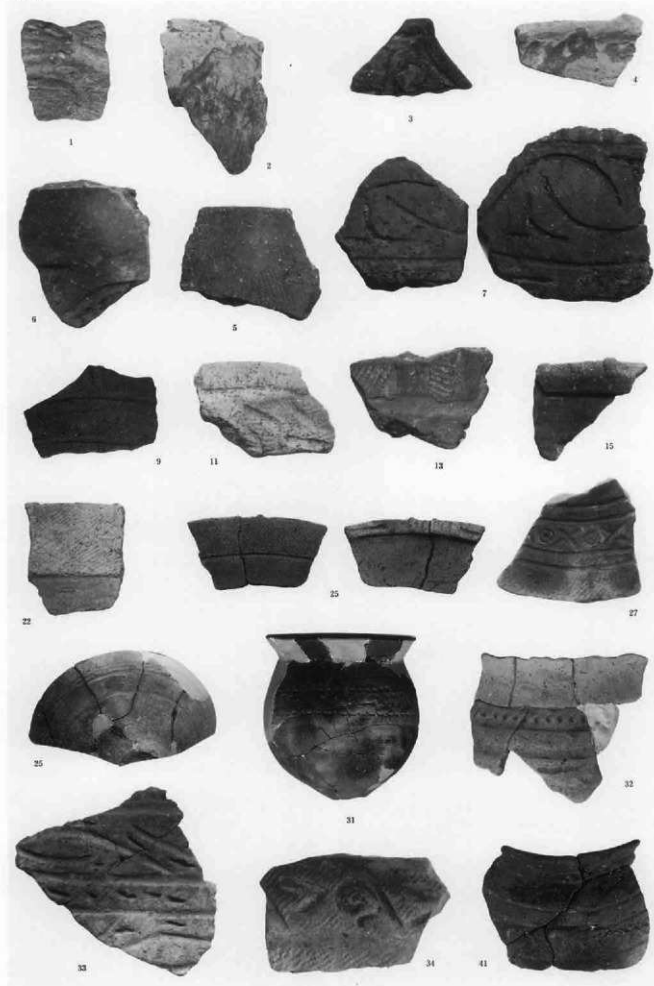
調查区 近景



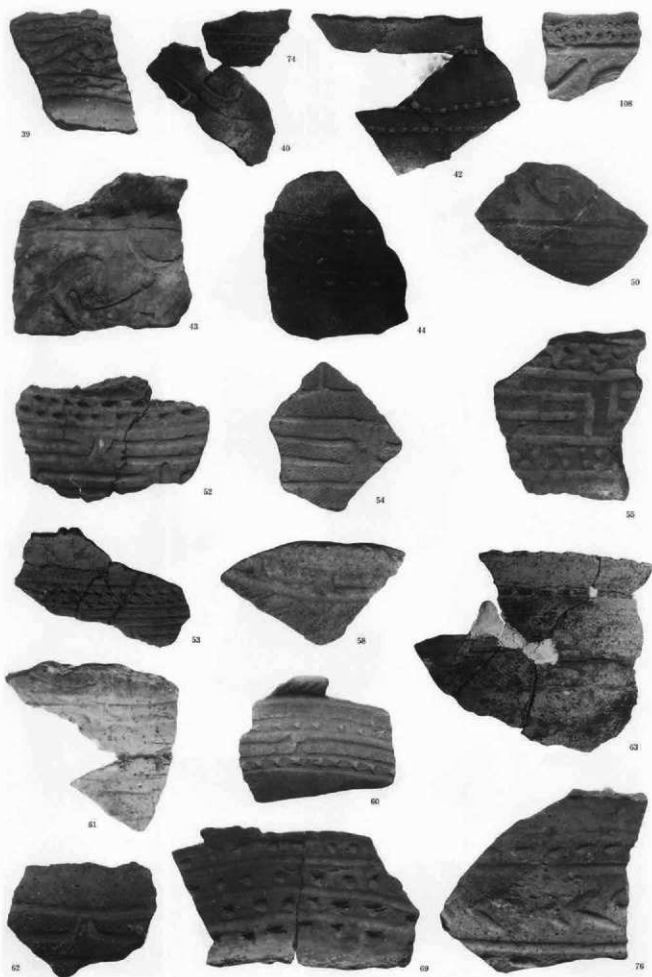


調査風景

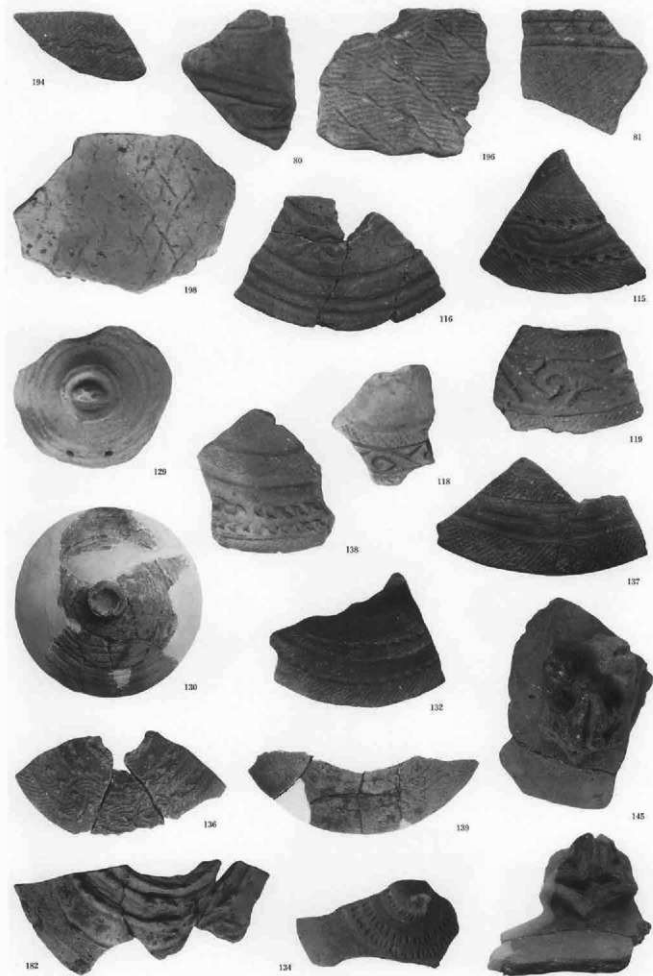


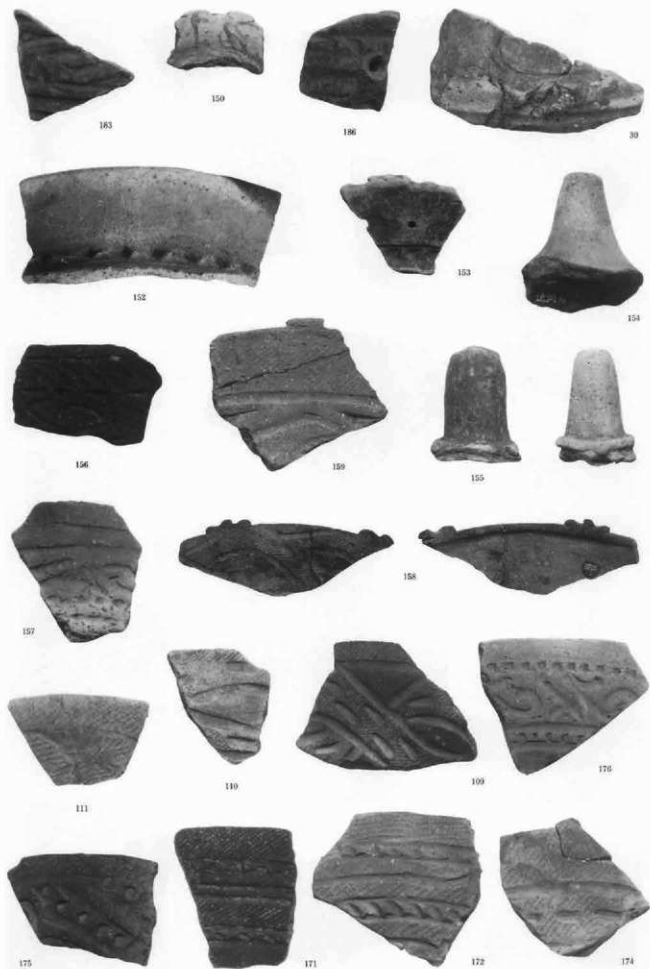


第1群土器、第2群土器

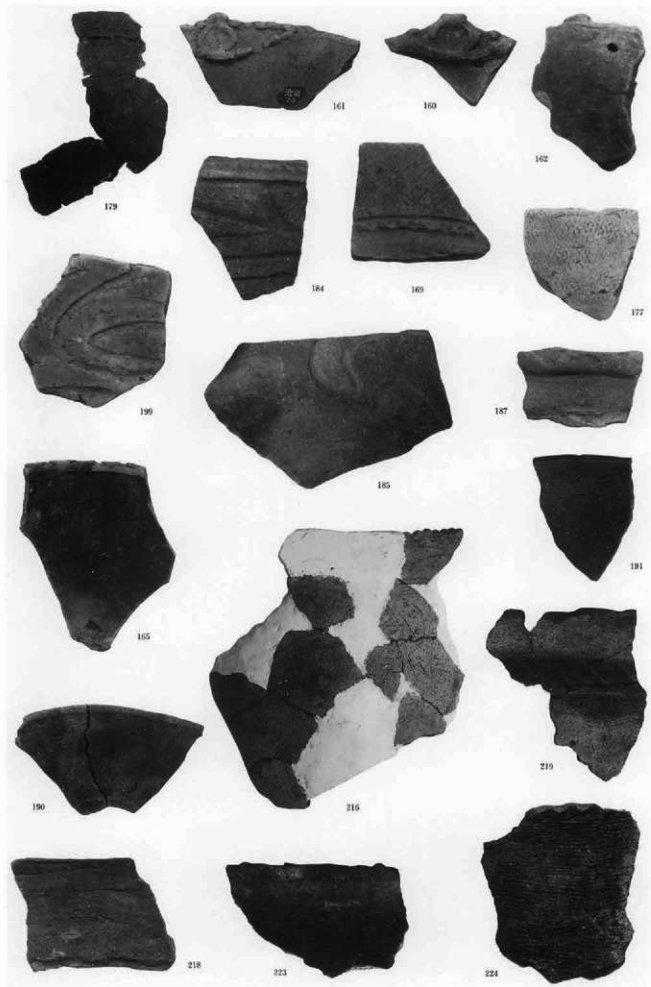


第 2 组上器(深绿)

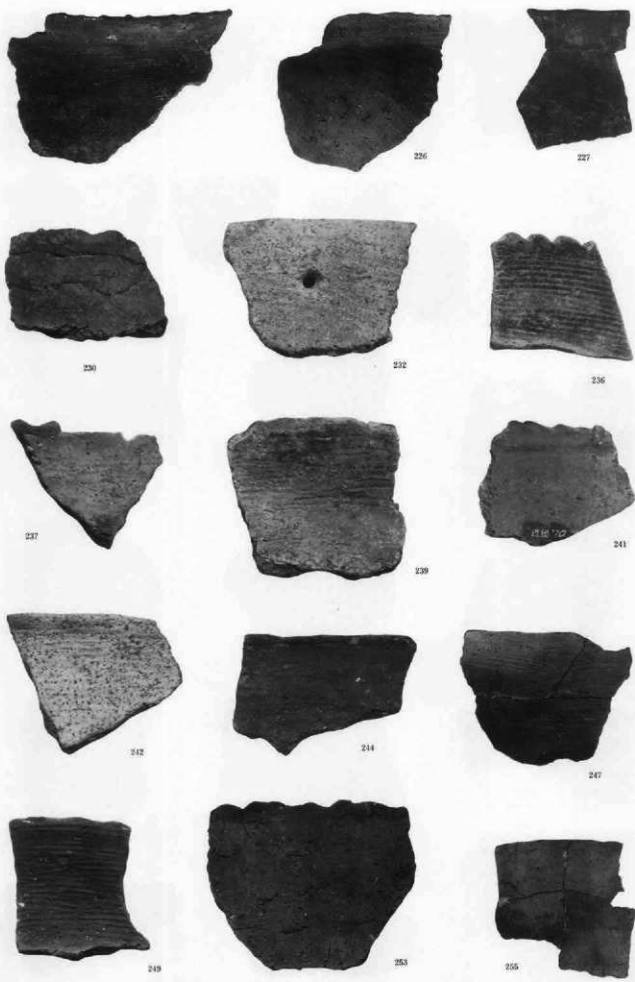




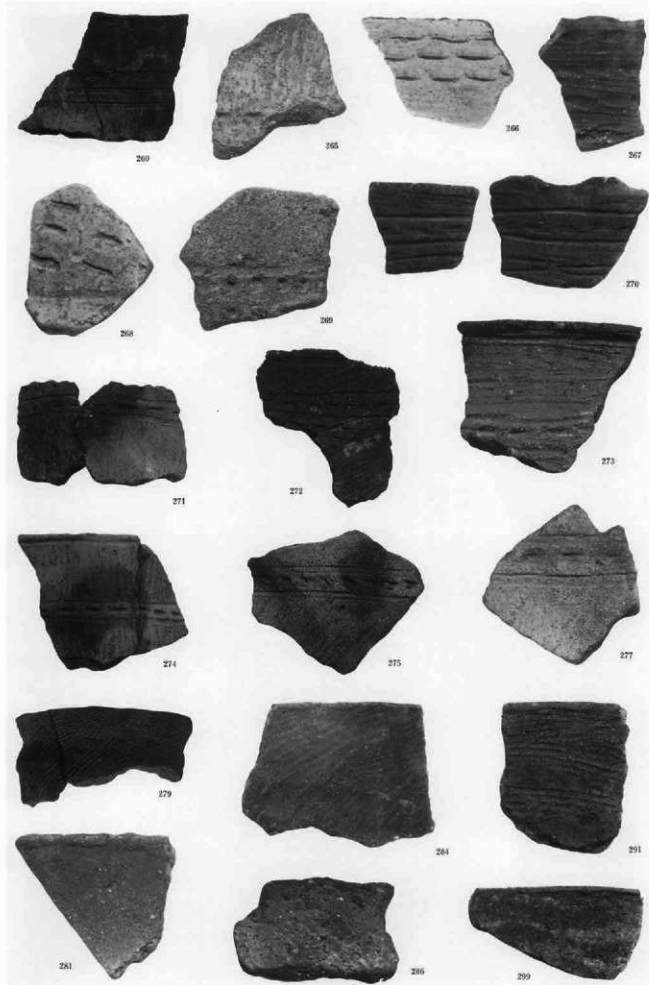
第 2 群土器(柱1・残片)

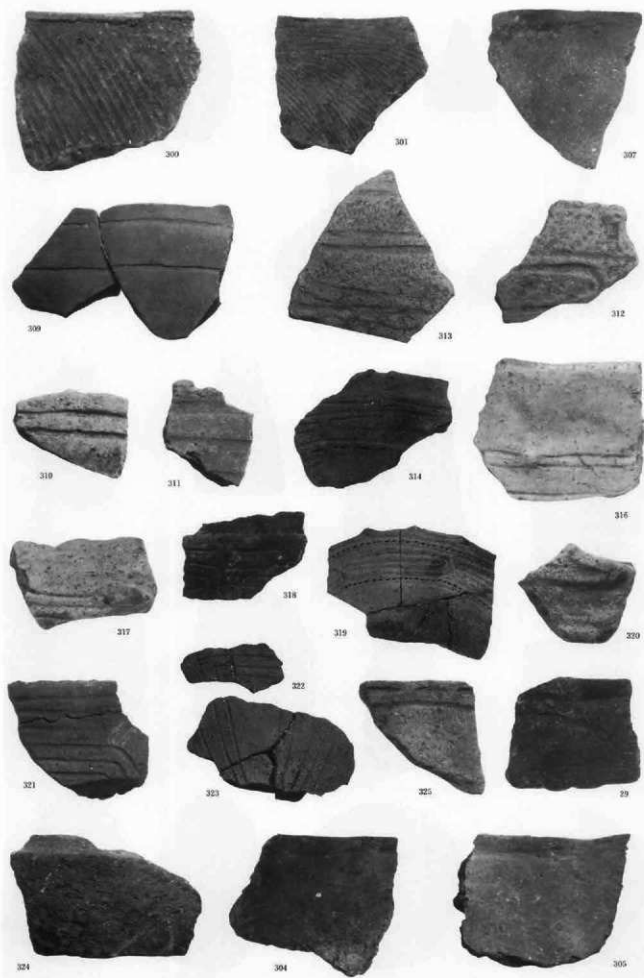


第 2 群土器(浅钵·粗灰)

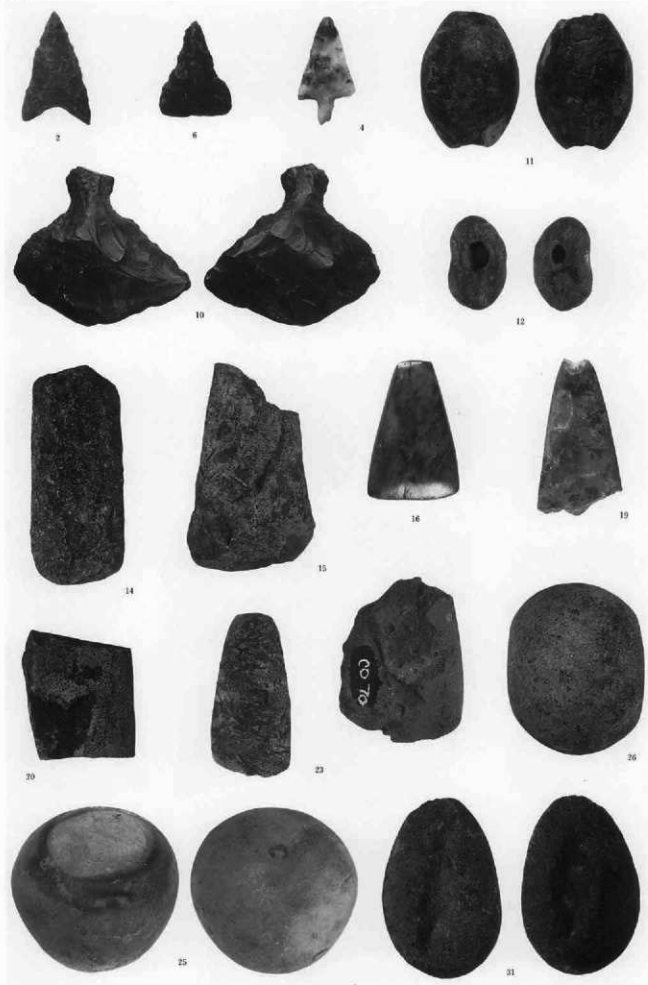


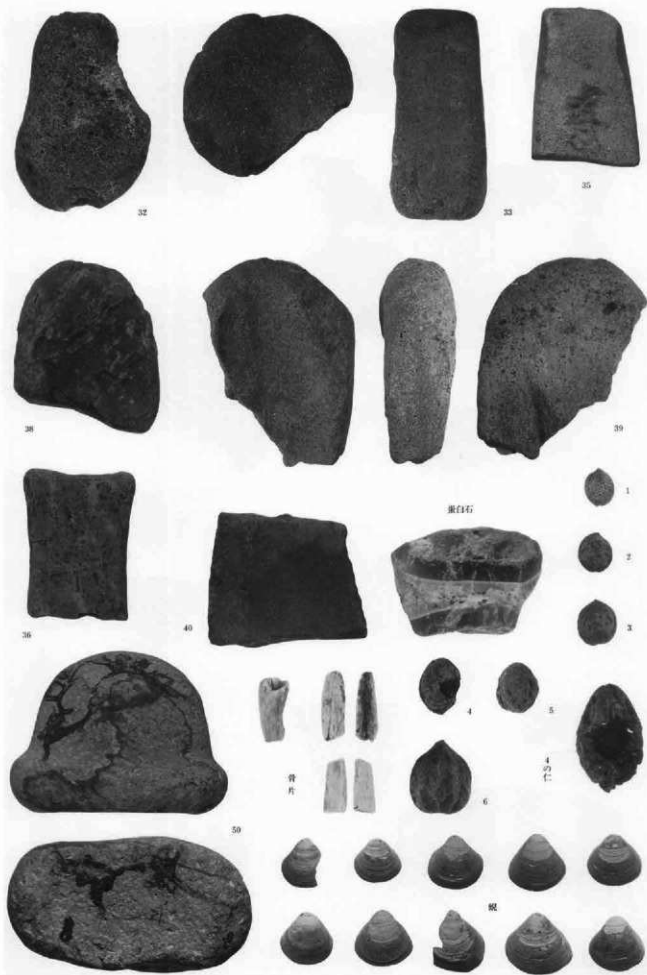
第 2 群土器 (複製)





第3群土器(深鉢・浅鉢・壺)



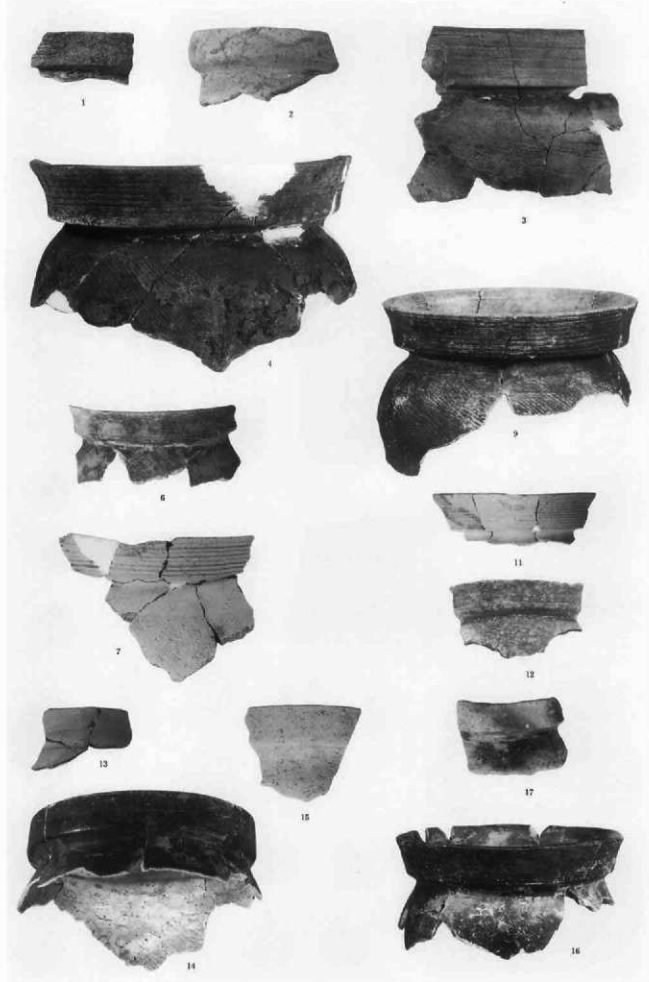


黒石

骨片

4の仁

黒





18



19



21



20



22



28



29



30



31



32



33



34



38



35



36



37



40



41



42



43



44

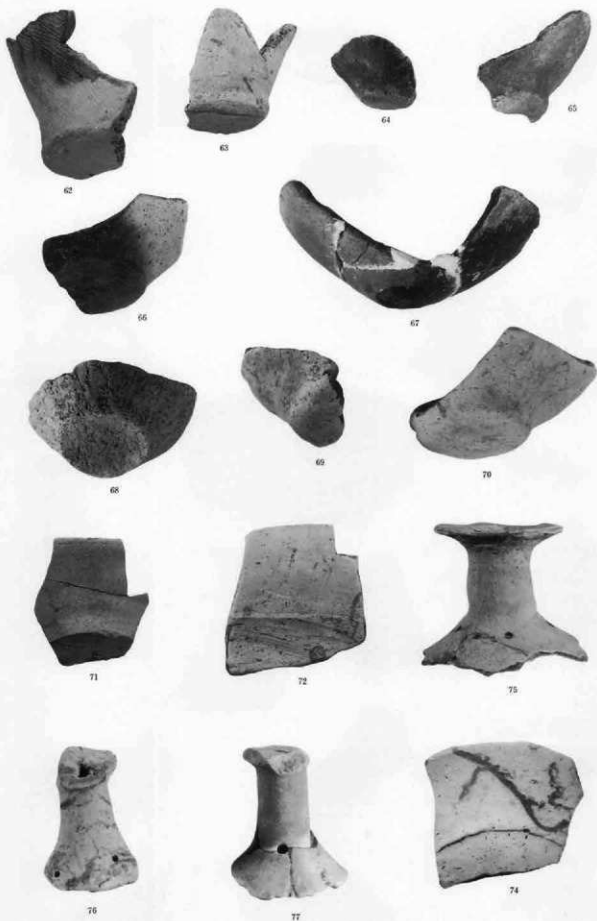


45

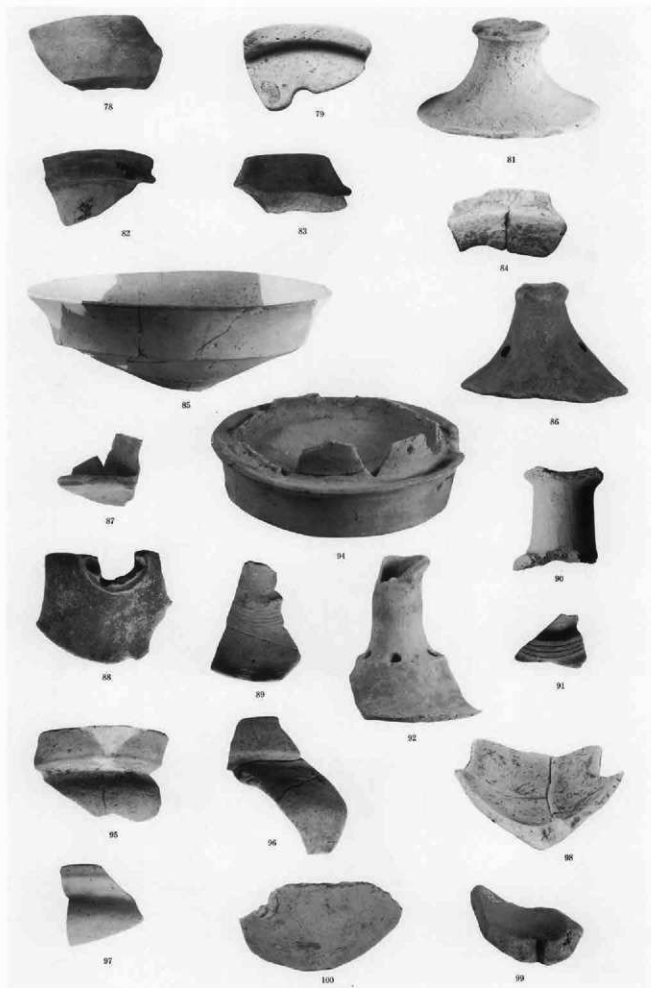


47

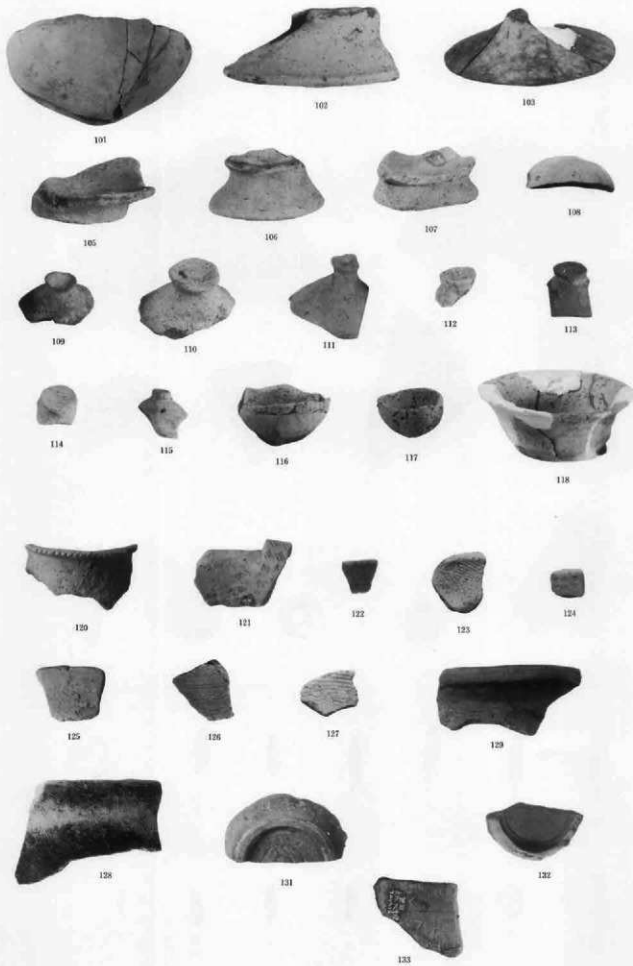




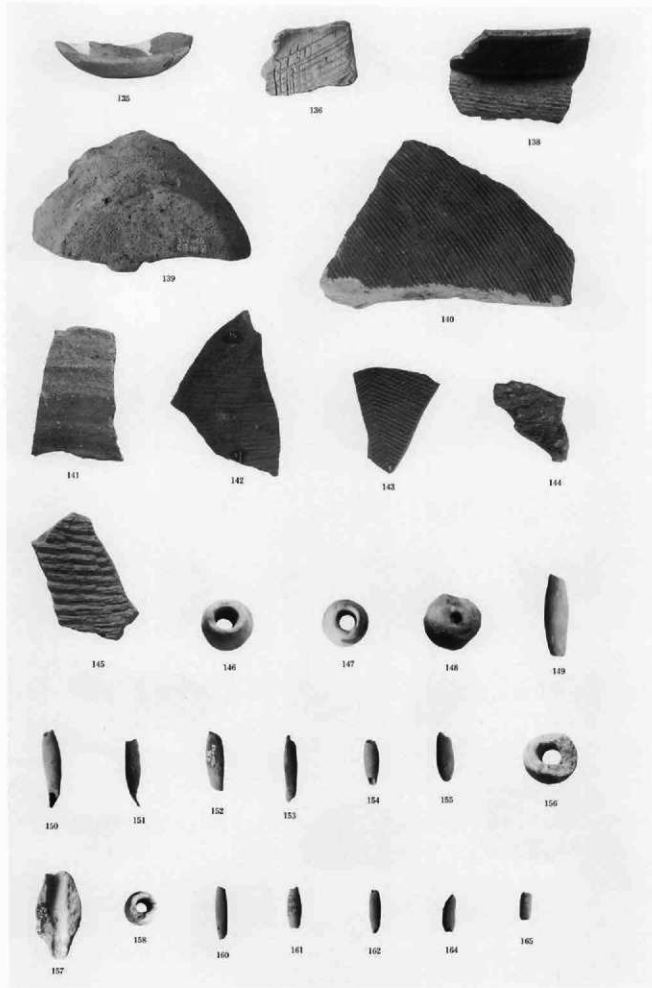
弥生土器・土師器(甕・壺・高杯)



莽生土器・土師器(高杯・器台・鉢)



弥生土器・土師器(鉢・蓋・小型)・須恵器



金沢市近岡遺跡

発行日 1995年3月30日(平成7年)

編集者 石川県立埋蔵文化財センター
発行者 〇921 金沢市米泉4丁目133番地
☎0762 (43) 7692

印刷所 株式会社 ハクイ印刷
〇925 羽咋市南中央町ニ83-51
☎0767 (22) 1243
